

企画書

著者 楽田コリス

【タイトル】 おじいさんとみかんとプリン

【概要】 この物語は、人類が始まってから、永遠のテーマといえる、人生とは、生まれてきた意味、目的、愛について、ひとりの少年の人生と、その家族との絆を背景に、目に見えない守護の存在との繋がりを交えながら、読者の皆様が、心豊かで安心して生きられる気付きを見つけていただける作品です。また、自分の中にあるネガティブな悲しみ、苦しみ、などで悩んでおられる読者様に、小さな光が差し込みますようお願いいたしました。

【想定する読者ターゲット】

- 一、三十代から六十代の男女
- 一、人生をどう生きていけばいいのか不安な人
- 一、自分には価値がないと思っている人
- 一、この世に本当の愛なんてないと思っている人

【第一章】 僕とドラゴン

- ・人は元々純粋なエネルギーである
- ・次元について

【第二章】 出来事は突然

- ・人は経験が違うだけで同じ心情を通過する
- ・平穏な生活の幸せ

【第三章】 初めての恋

- 誰もが恋をして経験する心情
- 人生は予測不能

【第四章】 病は気から

- ・心の成長と気付き
- ・生まれた時から死に向かっている

【第五章】 再会

- ・目に見えない世界との繋がり
- ・心と心の繋がり
- ・人生は計画通り？

「僕が居るところは何でもある。海も川も動物たちも植物も、欲しいと思うものは何でも瞬時に現れる。」

全てがエネルギーで出来ていて物質ではない。でも、触ろうと思えば触ることもできる。」

目の前に生クリームたっぷりの、イチゴのショートケーキを出現させることもできる。」

澄んだ夜空に満天の星たちを見たいと思えばすぐに見れる。」

感情はいつも穏やかで心地よく、楽しさと喜びで満ち溢れている。」

言葉は必要ない。」

話す前に、感情がテレパシーのように伝わってくる。」

みんな和かで争いもない。」

全ての人が尊重され、競争や比べる意識がない。」

僕はこの世界がとても好きで気に入っている。」

だがあるとき、僕が感じたことのないような、暗い感情が突然入ってきた。」

僕はこの正体は何なのか気になって仕方がなかった。」

考えても考えても答えは見つからず、ドラゴンを呼ぶことにした。」

ドラゴンは羽があつて足は四つ。」

色は白っぽくて、光の加減で銀色や金色に見えたりもする。」

大きさはそんなに大きくない。」

僕がまだ小さいから、ドラゴンも子どものドラゴンなんだ。」

誰でもひとりに一体もれなく付いている。」

人によつては鳥の場合もある。」

両方付いてる人もいる。」

「ドラゴン。この暗いものは何？」

「人の感情だよ」

「人の感情？僕も人だけど、こんな感情感じたことないよ？」

「そりゃそうさ。ここは6次元だからね」

「この感情は何次元のものなの？」

「三次元」

「へー。次元によつて違いがあるんだね」

「そうや」

「どうして？」

「それを説明すると、とてつもなく長くなる」

「そうなんだ」

「で、どんな気分だい？暗い感情って」

「よくわからないよ。初めてのことだし」

「ハハハ」

「なんで笑うの？」

「初めてじゃないよ」

「え？初めてじゃないだって！」

「そう。君は385回生まれ変わって、何度も何度もそんな感情を感じてきたんだ」

「でも僕覚えてないよ」

「そうだよ。記憶は消されるんだ」

「何で記憶が消されるの？」

「記憶を消さないと何の感動もなければ成長もないからさ」

「そうなんだ・・・」

「で、なんで僕は6次元に居るのにそんな感情を感じたの」

「もうすぐ3次元に出発する時が来たんだね」

「ワオ。そうなんだ」

「もう一度、3次元に行くためには、お母さん探しから始めないとね」

「わかった。じゃあ、お母さん探しに行くよ。ドラゴン手伝ってくれるかい？」

「もちろんさ！」

こうして僕はドラゴンと一緒に、お母さんを探すため、大きな映画のようなスクリーンを出現させた。

「誰か気になるお母さんはいるかい？」

「うーん。よくわからないんだけど、可愛い人がいないあ」

「可愛い人か・・・みんな可愛いよ」

「あつ、なんか気になるお母さんがいる」

「うん。この人は今、結婚しようとしてるね。でも、先のことを色々考えて不安になって、結婚をやめようかどうか迷ってるね」

「僕、この人をお母さんに決めるよ」

「いいのかい？」

「いいさ。先に僕が生まれたら結婚を迷うこともないし、先のことを色々考えたって仕方がないって教えてあげて、いろんな事を助けてあげたいんだ」

「そういうと思ったよ」

「じゃあ行っておいで。いい旅をね」

「えー！ドラゴンも一緒に来てくれないの？」

「私はいつも一緒だよ。三次元では私の姿は見えないけれど、いつもそばにいることを忘れないで」

「わかった。心強いよ」

僕の心臓が動き始めた。

目はまだできていない。いつも温かい水の中で泳いでいる。

僕のお腹には管が付いてて、ママと繋がれている。

ここからご飯が送られてくる。

時々、ママとパパンの会話が聞こえてくる。

音楽も聞こえてくる。

二人の会話を聞いてると楽しいけど、もつと僕に話しかけて欲しいと感じた。

だんだんと僕のいる場所が狭くなってきて、それと同時にママンが苦しそうにしていることが多くなった。

僕は今すぐにここから出たいと思った。すると、ママンが急に苦しみ始めて、パパンが車で病院に連れて行ってくれた。

「狭いぞ。狭いぞ。暗いぞ。もつと狭くなるぞ。こんなところから僕は出れるのか？ママンがすごく苦しがつている。早く出てあげたいんだけど、狭くてなかなかすんなりと出れそうにないんだ。待っててね。ママン。僕、もう出るからね」

「んぎゃー！おんぎゃー」
僕が誕生した。

「ドラゴンがいない。でも、いつも一緒だつて、側にいるつて言ってたね。姿が見えないつても言つてたね」

僕はひとしきり声を出して眠った。

「みゆき。よく頑張ってくれたね。僕たちの赤ちゃんだよ」
パパは眠つてる僕を、ママの隣に寝かせてくれた。

「あなた、嬉しいわ。今日から私、お母さんになるのね」
僕は眠りながら、ずつと前からお母さんだよつて思った。

パパは涙もろいらしく、ずつと泣いていた。
もちろんママも笑いながら泣いていた。

僕が生まれてきたことを、こんなにも喜んでくれることが、とても嬉しかった。

パパとママは、僕が生まれる前から名前を決めていたらしい。
候補が二つあったらしく決めかねていて、生まれた時の感覚でどちらかにしようつて話し合つていた。

僕はお腹の中でそんな会話を聞いた。
結局、僕の名前は「良和」と決まった。

僕はまだ言葉を話せない。いつもママに伝えようとすけれど「バブバブ」とか「アー」としか音にすることができない。

ママは楽しそうにしている時もあるけれど、悲しそうに見える時もある。

お外が暗い時に僕が目覚めたり、お腹が空いたり、オシッコをして気持ち悪かつたりすると、ママは何だか辛そうだった。

僕は不意に、生まれてきてよかったのか？ママを助けるために生まれてきたのに、生まれてこない方が良かったのかもしれない・・・と感じてしまう時、僕が生まれて喜んでくれた、ママの姿を思い出すことにした。

時々、ドラゴンの姿が見えた。

僕はニッコリ微笑んでドラゴンを見つめた。

ドラゴンは（いいぞ！いいぞ！その調子）と言ってる。

テレパシーで僕は感じた。

僕はよちよちと歩くようになり、ママのおっぱいをあまりもらえなくなった。

少し寂しかったけど、ミルクがあまり出なくなってきたから、そんな時かな？と思っていた。

ある時、ママは僕に素晴らしく、とてつもない美味しいものを、僕の口に入れてくれた。

口に入った瞬間、とろけるようにほんのり甘く、口を開けたり閉じたりしながら味わった。

下の方に少し茶色い部分があつて、いつも気になっているけれど、ママが食べてしまう。

僕はその茶色い部分が欲しくて欲しくて仕方がないのに、ママは

「ここはまだダメ」と言つて僕にしてくれない。

僕は悲しくなつて泣いてしまう。

ママは抱っこしてくれるけど、僕はどうしても、あの茶色い部分が欲しいんだ。

泣き止まない僕に、ママはおしゃぶりとやらを僕の口に入れるんだ。

「なんの味もしない、ビニールのようなおしゃぶりで、泣き止んでたまるか！」と思うんだけど、なぜか僕は泣きやんでしまう。

きつと「良い子。良い子ね」と言つてママが笑ってくれるからだと僕は感じた。

決して、このおしゃぶりを気に入っていると、認めたくなかったのかもしれない。

僕は保育園に行くようになり、友達もできた。

もちろん、好きな女の子もいる。

いつも砂場でおままごとにつき合つてあげている。

そんなに楽しいわけではないけれど、ただその子と一緒に遊びたかつた。

家が近かつたので、お互いのママと一緒に買い物や、夏休みには映画を観に行つたりした。

ママ同士で、お話が盛り上がっている時は、僕はその子に熱い視線を送るんだけど、どうもこの子はテレパシーがわからないらしい。

その子のママの生まれた場所は、愛媛県つてところで、毎年、冬になると食べきれないほどのみかんとやらが送られてきて、手が黄色くなるほど食べるのだとか・・・

その、みかんとやらを食べると、テレパシーがわからなくなるのかもしれないが、好きな女の子の好きなものは、好きになってみたいと思うのは僕が男の子だからか？
性格なのははまだわからない。

そんな僕の気持ちをママは察してくれたのか、おやつに缶詰のみかんを出してくれた。
僕を外から見ると、冷静を装っているかのように、見えるかもしれない。

初めて食べる食べ物に、静かに興味を持って、見つめているように見えているかもしれない。

だが、僕の心の中は、高速で回転しながら飛び上がり、喜びの舞を踊っていた。

ひとつ口に入れた。

何とも滑らかな舌触りで、優しくつるんと僕の舌の上に乗った。

あまりに気持ち良くて、しばらく口から、出したり引つ込めたり、また少し出したり引つ込めたりしていた。

ママは「お行儀が悪いからやめなさい」と言うけれど、楽しいことは長く味わっていたいと思っていた。

最初の噛みごたえも最高だった。

一粒、一粒がプチプチと、弾けながら果汁が口の中に広がっていく。

接着剤でくっついていたわけでもないのに、一粒が集まって一個の形を形成し、分離するときには簡単にバラバラになっていく。

何とも素敵な果物だと、僕は満たされ、幸福感でいっぱいだった。

この後、僕はママによく「つぶつぶ」と言ってみかんをよくねだるようになった。

楽しかった保育園の生活も、わけがわからないまま過ぎていき、

僕は小学校へ通うようになった。

色々な決まり事があったて、少し窮屈にも感じたが、ルールだから仕方がないと思った。

保育園でもいろんな決まり事はあったが、まだゆとりがあって、個人の個性が重んじられている所のような気がする。

決まり事があるから、短い休み時間が待ちどうしくて、とても楽しく感じるのかもしれない。

勉強は楽しかった。

簡単ですぐに理解ができたから、面白いと感じた。

だがある時、僕は手をあげて答えた答えが違っていた。

とても恥ずかしくて、周りのみんなが「間違えやがった」と心の中で思っているのを感じた。

それ以降、僕は積極的に手を挙げることはなかった。

先生に当てられても、自信なさげに答えている僕がいた。

こんな些細なことがきっかけで、僕の心の中の何かが、形を変えて変化していくのを感じた。

自信がない。人の目が気になる。僕は正しいのか？間違っているのか・・・

どんな事にも繊細に、敏感に、ふわふわとして、丸い、温かいものが、心の中から消えていくような感覚を感じた。

それは、森の木々の緑の色が、色褪せていくように、青い空が燦んで見え、小川の水のキラキラとした輝きが、太陽の陽の光を遮られたかのように、全ての物事が色褪せて見えた瞬間だった。

この頃から、僕は毎晩泣いた。理由はわからない。理由はわからないが、夜、眠る前に涙が止まらなかった。

朝になると、学校へ行く。

休み時間は楽しかった。みんなでサッカーをしたり、雨の日は、みんなを集めて面白おかしい話をしたり、モノマネなんかをして、みんなを笑わせた。

そして、夜になると悲しくなつて、一人で泣いた。

パパもママも何も知らない。

知っていたとしても、どうすることも出来ない。

悲しくなつて、涙が出る原因が、僕にもわからないからだ。

僕は成長することに、あまり笑わなくなつた。

お笑い番組を見ても、漫画を読んでも、何が楽しいのかわからなくなつていった。

毎日、毎日、どうしてこんなに悲しくなるのか・・・

どうして、涙が出て泣けてくるのか・・・

僕は、その原因を考える事にした。

考えているうちに、どうして此処にいるのか？

何で生まれてきたのか？

何がしたいのか？

そう考えるようになり、僕が出した結論は、考えてもわからない。

と、答えを出した。

この答えが合っているかどうか、その答えはNOだ。でも、考えても答えがわからないから仕方がない。

僕にも楽しいことはあつた。

パパの仕事は消防士で、夜勤の勤務もあつて、夜、家にいないこともある。

毎日、忙しい仕事の合間を縫つて、よく一緒に遊んでくれた。

公園でキャッチボールをしたり、昔、パパがよく遊んでいた、駒回しや、面子を教えてください。

ママには内緒で、男同士の秘密もあつた。

パパは僕に色んな話をしてくれた。

パパが僕と遊んでくれる時、僕は楽しくて、嬉しくて、その時間を夢中になることができた。

仕事で家にいる時間が少ないから、僕との時間を大切にしてくれた。

ママが僕を大切に想ってくれていることも知っていたが、パパが僕を愛してくれていることを、肌でたくさん感じた。

僕が転んで怪我をすると「男の子は強くないと駄目だ」と言いながら、パパの目は心配そうに僕を見ている。

傷の手当ても、ママに譲らず、パパが消毒して薬を塗ってくれる。映画にもよく連れて行ってくれた。

「どうしてママも一緒じゃないの？」と、ある時パパに聞いた。

「ママも色々忙しいから、自分一人の時間も必要なんだ」そう言っていた。

小学生、最後の夏休み。パパは僕をキャンプに連れて行ってくれた。

「じゃあ、ママ行ってくるね」

パパは荷物を車に乗せ終わると、ママにバイバイのハグをした。

ママとパパは仲が良くて、行つてきますの時は、こうしていつもハグをしている。

「気をつけてね」

手を振るママが小さくなって行く。

「どうしてママは来ないの？」

「ママは来たがっていたよ。でも、パパは良和と二人で来たかったんだ」

「ママ、可愛いそうじゃないの？」

「大丈夫さ。ママは一人の時間も楽しみたいんだ。パパは男同士が好きなんだ。特に、良和とね」

僕はニッコリ微笑んだ。

「さー。着いたぞ。スプリング日吉だ。ここは夜になると蛍も見れるからな。いい所だぞ。良和、荷物降ろすの手伝ってくれ」

「うん！」

夏休みの宿題が、まだ沢山残っていたのが気になっていたが、今は、パパと二人でキャンプを楽しむこと以外、何も考えない事にした。

「パパ、緑がすごく綺麗だね」

「ああ。そうだろ。人間、たまには自然と触れ合えないといけないからな」

「どうして、自然と触れ合えないといけないの？」

「自然は偉大だとパパは思ってる。良和もそのうちわかるよ」

キャンプに来て、パパとたくさんの事を話した。

学校のこと、友達のこと、勉強のこと、好きな女の子のこと。

パパは黙って、僕の話聞いてくれた。

でも、夜に泣いてしまうことは、どうしても言えなかった。

「良和、パパは良和が中学生になる前に、二人で此処へ来ることを決めていたんだ」

「どうして中学生になる前なの？」

「中学生になると、勉強や部活動で忙しくなる。塾にでも通うようになるよ、ママもパパも良和と遊ぶ時間がなくなるからね」

「そうなんだ」

「まだ今は子供だけど、中学生になるとまた違う。まだまだ子供だけど、大人と子供の中間地点だとパパは思っている。大人でもない。子供でもない。って感じかな。どんな時も大切だけど、この時間は特に大切だとパパは思っている。その前に、こうして良和と二人の時間が欲しかったんだ」

「うん」

「良和も知っているように、パパの仕事は危険を伴う仕事だね」

「うん」

「良和に頼みがあるんだ」

「うん。なに？」

「もし、パパに何かあったら・・・」

「いやだ！パパ。もしもでも、そんな事聞きたくない」

「わかってる。わかっているよ。でもな、大切な話なんだ。だから聞いてくれ」

僕は、こぼれ落ちそうな涙が流れないように、パパの話を聞いた。

「ママはとても強い。強くてしつかり者で、優しくて、おつちよこちよいな所もあるけど、そんな全部が好きで、パパはママをお嫁さんにもらったんだ。でも、ママにも弱点はある。芯が強いから、それが折れてしまった時は、強いからこそ脆いとも言えるんだ」

「よくわかんないよ」

「そうだな。よくわかんないな。パパが言いたいことは、ママを助けて欲しいってことなんだ。パパがいる間は、パパが全力でママを守るよ。いつか、いつかわからないが、パパがいなくなった時、それは寿命かもしれないし、病気かもしれない。事故かもしれない。生きていたら、何が起こるかわからない。そしたら、良和、お前がママを助けてあげて欲しいんだ」

「わかったよ。わかったけど、どうやって助ければいいの？」

「良和なら、その時わかるよ。その時、どうするべきか。どうすればママを助けられるのか。きっとわかるよ」

「ほんとに？」

「ああ、本当さ。だってパパの息子だからな」

「わかった」

「ありがとう。ありがとな。この事はママには内緒な」

そう言つてパパは人差し指を、口元にあてた。

「パパ、また二人の秘密ができたね」

「そうだな。また増えたな」

何となく、パパの目にもうつすら涙のようなものが見えた気がしたが、パパと僕は笑っていた。

その後、僕とパパは螢を探しに行ったり、手が届きそうな、夜空の星を眺め、最高に楽しい時を過ごした。

帰りの車の中で、パパは、パパのパパ。僕のおじいちゃんが、もうすぐ家にきて、一緒に暮らすようになる事を話した。おばあちゃんは、早くに天国に行ったらしくて、おじいちゃんひとりでは色々大変になってきているらしい。

おじいちゃんは、まだまだ大丈夫だと言っていたらしいが、パパが説得して、一緒に暮らすことに決まったら、パパは言っていた。

ある日曜日、家の前に大きなトラックが来た。

おじいちゃんが、我が家へ引越してきた。

ママは「たくさんの荷物は入らないって言ったのに。どうするつもりなんだろうね？」とブツブツ言っている。

トラックから、パパが荷物を家の中に運んでいる。

中くらいのダンボール箱が八個と、ロッキングチェアだけだった。

「あなた、荷物ってこれだけなの？」

と、ママは目をまんまるにして言った。

「そうだよ。そんなに荷物入らないから、ほとんどは処分したんだ」

「あんなに大きなトラックで来たから、沢山の家具や荷物があるのかと思ったわ」

「レンタカーがね、あれしかなかったんだ」

「あら、そうだったの」

ママはホッとしたように笑っていた。

おじいちゃんとは、毎年ではないが、夏休みやお正月に会っていた。

背が高くて、髪の毛は真っ白、お髭も真っ白。

ゆっくり動くけど、腰も曲がってないし、杖もいらなそうだ。

パパやママも、家の中を整理して、おじいちゃんの荷物が入るように、準備していたらしく、一階の一室を、おじいちゃん部屋にした。

「みゆきさん、これから厄介になります。すまんね」

「お父さん、たくさんの物、捨てなくてはいけないことで、すみません。お母さんとの思い出やら、色々あったでしょうに」

「いや、どうせ、いつかは、手放す事になる物。早いか、遅いかだけ、ま、少し、思い切りはいましたかね」

おじいちゃんは、ゆっくりと髭を触りながら微笑んでいた。

「まあ、そうですね。じゃあ、お父さんも、一人で家の事されていたことですし、お料理だって上手なんですから手伝って下さいね」

パパは苦笑いをして、おじいちゃんと目を合わせていた。

「だって、こつちに来て、何もしなくなったらボケますよ。私が楽をしたいから、言ってるんじゃないからね」

「いやいや、そうは思っておらんよ。ただ、台所に入ることが嫌でないのなら、わしも、その方がいい」

おじいちゃんは、朝が早いから、朝ごはん担当になった。

お昼は、自分が食べたいときに、それぞれで、夜は、基本、ママが担当だけど、よく、おじいちゃんに甘えてお願いしていた。

おじいちゃんも、喜んで作ってくれた。

おじいちゃんの作る料理は、僕はあまり食べたことのない、ずいきのお浸しや、万願寺とうがらしとジャコのいり煮、芋のつるを金平にしたり、わけぎと貝のてっぱいとか、おぼんぎいってのが得意だった。

そして、とても美味しかった。

ひじき煮や、切り干し大根くらいは僕も知っていたが、おじいちゃんは、僕の知らない料理を、沢山、色々作ってくれた。

僕が、一番好きなおじいちゃんの料理は、筍の天ぷらだ。

おじいちゃんは、筍を濃い味で煮て、それを天ぷらにしてくれる。筍にしっかり味が付いてるから、塩も天汁も、何もいらぬ。そのまま、そのままがとても美味しいんだ。

家族の中で、いちばんお喋りなのはママだけど、おじいちゃん、あまり喋らない。

喋らないけど、僕の目をじつと見つめたり、パパともたまに、喋ってないのに目だけ合わせて、微笑んでることがある。

僕は、おじいちゃんに目を見られた時、嫌な気持ちはしないんだけど、よくわからなくて、首をかしげることが多い。

それが、徐々に、どう反応すればいいのか、どう返せばいいのかわからなくなつて、おじいちゃんの目を見て、心の中で（どうしたらいいかわかんない）と思った。

おじいちゃんはその瞬間、にっこり微笑んだ。

僕も、つられてニッコリ微笑んだ。微笑んだというよりも、苦笑いになつていたかもしれない。

その夜、おじいちゃんは、初めて、ハンバーグを作ってくれた。

「おじいちゃん、こんなのも作れるの？すごいや」

「ほほん。わしは、おぼんざいしか作れんと思つとつたな？結構いけるじゃろ？」

おじいちゃんは、得意そうに髭を触った。
そんな流れで、僕は自然とおじいちゃんに聞いた。

「おじいちゃんはいつも黙って僕の目を見るのは何故？」

「ほー。わしは・・・多分無意識じゃな」

「無意識？何？それ。その答えの意味がわかんないよ」

「ふむ。良和の目を見ようと思つて見てるわけではない。ただ、今日も元気か？今日はどんなものが食べたいか？と良和の目を見て考えてるんじゃないかな」

「へー。そうなんだ。よくわかんないけど。わかつたような・・・」

「んむ。おじいちゃんもどう説明していいかわからん。おじいちゃんの宿題じゃ」

そう言つて、おじいちゃんは「ハッハッハッ」と笑つた。

この頃から、僕はおじいちゃんと話すことが楽しくなつた。

そして、おじいちゃんに「今日は、何を作つてくれるの？」と聞くようになり、おじいちゃんは「わしは、朝ごはん担当だからな」と言つてまた「ハッハッハッ」と笑つた。

学校から帰つて、宿題が終わると、僕はよくおじいちゃんの部屋に行つた。

天気がいい日は、おじいちゃんの散歩に付き合うようにもなつた。

ママは、おじいちゃんが来てから「洗濯物は増えたけど大助かりよ」と言つて喜び、パパは、僕たちが仲良くしている姿を見て、嬉しそうにしていた。

ある時、僕はおじいちゃんと散歩をしながら、パパとキャンプに行つた話をした。

「ほう、あそこへ良和も行つたのか？」

「すごく楽しかったよ。蛸もいてね。星なんかは凄く凄く近くに見えたんだ。バーベキューも楽しくて、美味しくて、最高だったよ」

「昔は、螢ももう少し沢山いた。時にはリスやキツネを見ることもできた」

「おじいちゃんも知ってるの？」

「あの場所は、おじいちゃんが良和のパパを最初に連れて行ったんじゃないよ。不思議な話があつてな」

「そうなんだ。不思議な話つて？」

「わしがまだ二十歳になるかならん時の頃に、不思議な夢を見た。白い蛇が出てきてな、行け。行け。と頭の中に聞こえるんじゃない。わしは目が覚めてからも、その夢のことが気になって仕方がなかった。そして、わしは親友にその事を話した。そんなに気になるならそこへ行けつて。そう言われても、そこがどこだか、わしにはわからん。その友は一緒にその場所を探してくれた。どれだけ時間がかっただろうか。ここだと思ふ場所に行つては、違ふと感じ、また、ここかもしれないと思つて行つたが、ここではないと感じ、諦めかけてた頃、わしは車を手に入れた。嬉しくて嬉しくて、ドライブをしては、様々な場所へ行つた。そんなある日、氣の向くままハンドルを握り、アクセルを踏んだ。そろそろ休憩をしようと車を止めた。その場所でトイレに入り、トイレから出たすぐの看板を何気に見た。わしは、涙が溢れてきての。周りの目が氣になるから、もう一度トイレに入って涙を拭つた」

「おじいちゃん、なんで泣いたの？」

「おじいちゃんの名前は、竜野 龍二だな。わしは、小さい頃からこの名前が嫌で仕方がなかった」

「なんで、嫌だったの？かっこいい名前だよ」

「今では、わしもそう思う。だがまだ若い頃は、名前負けてわかれるかの？こんな、ご立派な名前を両親から頂戴していたが、それに自分が相応しくないと、勝手に思い込んでおつた。それを、ある時父親に話したんじゃない。するとわしの父親はこう言った。昔、わしが母親のお腹にいる時、八卦見のおばあに言われたらしい。『あなたの家系には代々龍神と縁がある。龍神を信心し、毎日、新しい水を供えよ。もうすぐ生まれてくる赤ん坊は、人を救うかもしれない』」

その八卦見のおばあは元々巫女の家系の人よ。母親のお腹にわしがいることも知らなかったはず」

その話を聞いて、わしは龍神や龍神に縁のある神社を調べた。調べたところで、それがどうなる事もないとわかっているが、何かに突き動かされるように書物をあさったの。

そのうち、わしは、不思議な夢を度々見るようになった。ある時は、大きな口を開けた龍がこつちを見てる。ある時は、地から天に龍が上っていく。意味はわからんが、しばらくして、そんな夢も見なくなった。

そして、社会に出て色々迷い、悩み、苦しんだ。人は大抵、金か人間関係で悩み苦しむ。そのほかにも、身体や異性関係もあるが、わしの場合は全部だな。

何故、こんなに苦しいのか、こんなに苦しい思いばかりするなら死んだ方がええとまで思った。

生きてたって仕方がないと思った。

そんなある日、黒い長い蛇のような、クネクネしたものが夢に出てきた。

龍だ。わしはハッとして、じつとそれを見ていた。そしてわしに言った。

（私がいる。私がここにいる。いつもここにいる。闇を意味嫌うでない。私を守る。私がお前を守っている。忘れるな。）

わしは目が覚めてから泣いた。

嫁や友、誰にも言えんことが誰でもある。

わしは、その時思った。いや、感じたんじゃ。

ずっと一人で孤独を感じていた。家族を守っていかねばならん。弱音も吐けん。

しかし、男も人間じゃ。頼りたい時もあれば、甘えたい時もある。そんな全てのわしの想いを、全部語らずとも知っていてくれる。父のような母のような、近いがまた違う。

大きくて、強くて、なんとも温かいものを感じた。

感動と喜びで涙が溢れて、しばらく泣いたの」

「で、おじいちゃん、なんで泣いたの？」

「うむ。それでだな、おじいちゃんは、色々調べたり本を読んだりしたと言ったの？」

「うん。言ってた」

「でだ、これまでの点と点が繋がった瞬間だったんじゃよ。良和の住んでる場所は？」

「地球だよ」

「地球だけど、地球の中の？」

「あ、日本だ！」

「そう、日本だ。さあ、ここからは、家に帰ってからだ」

「なんでえ。家に帰ってからのなの？おじいちゃんまたおしっこ？」

「それもあるが、ここからはあれがないと話がわからん」

「あれって？なに？」

おじいちゃんはなんだか楽しそうで、おじいちゃんは大きな地図を出してきた。

「良和、よく日本を试试看。何かの形に似とらんかの？」

「うーん。わかんないなあ」

「龍じゃよ。日本は大和の国。日本の中にまた日本があるのがわかるかの？」

「えっ。日本の中の日本？」

「そうじゃ。日本の中に日本の形に似たところがあるじゃろ？首をこう左斜めにかしげて見てみる」

「あっ。あつた」

「そうじゃ。京都じゃ。京都全部が日本の形にそっくりじゃ。その京都の中の同じ形が、良和の行ったキャンプ場よ」

おじいちゃんは満面の笑みで髭を触っていた。

「で、おじいちゃん。点と点が繋がったってこのことなの？」

「そうじゃよ」

「もう少しさ、僕にわかるように言ってくれない？」

「おお。そうか。すまんすまん。でな、日本の形は龍の形に似てると言われとる。日本が龍の国なら、またその形に似た京都も龍の国じゃ。そして、あのキャンプ場の看板に、空からみた形が書いてあつての、天若湖は龍の形をしとる。あのキャンプ場は龍の森と

言って、天若伝説つてのがあるんじやの。わしは、それを見た途端に、龍の夢を見た時の、なんとも言えん温かな感覚を思い出して、嬉しくて泣いたんじや。ずっとここにいる。ずっと守ってる。つて言葉が本当だったと腹に落ちた瞬間とでも言うのかの」

「なんだか、いい話だね」

「おお。さすがわしの孫よ。良和、わかるかの？」

「うん。なんとなくだけど。で、おじいちゃん、天若伝説つてどんな話？」

「ま、早い話がな、神と人間と、土地や自然で、平和で良きことを創造していこうという話じゃな」

「そ・う・ぞ・う？」

「そう。創造じゃ」

「なんか難しい。ってか、あんまりわかんない」

「この世の中は創造なくして、何も生まれん。良和の好きなゲームも魔法のように、いきなり出現したのではないな」

「うん、誰かが造ってくれた」

「そう。誰かが創造したんじや。この世の全ては、こんなのがあったらいいな。こんな物があつたら便利だな。こんな物があつたら美しいな。綺麗だな。そういう思いから人は創造し、造り上げていく」

「僕の好きなプリンも？」

「そう。良和の大好きなプリンも、誰かが最初に造り、人が豊かになる度に、もつと甘い方がいい、もつとなめらかな方がいい、もつとあっさりしたほうがいい。と、色んな人に改良され、さまざまな種類のプリンが誕生した」

「そういえば、僕はつるんとした舌触りの、キャラメルは液体でない方が好きだよ」

「ほう。そうか。おじいちゃんは、キャラメルは液状の方が好きじゃ。食べ物だけに限らず、世の中は、すべて創造から成り立っている。そのようにして、世の中を見てごらん。実に愉快で面白い」

「へくそうなんだ」

「とつても難しく聞こえるようじゃが、そうでもない。そのうちわかってくる」

「わかった。そんなふうに見て見るよ。それから、おじいちゃんが会った龍って？」

「ふーむ。ようはわからん。あれ以来、何も見えも、聞こえもせん。だが、あの八卦見が言ったように、家系的にか、わたしには龍神が守護してくれている。それだけは確信しとる。そして、あの場所に行くと、龍を感じられるような気がして、大好きな場所の一つとなった。」

「おじいちゃんがパパを連れて行ったのって意味があるの？」

「おお。そんなことを聞いてくれるのか。意味はある。学校や世間では教えてくれんことは山ほどある。この世界は謎に包まれ、神秘的で、考え方ひとつで楽しく生きることできれば、苦労ばかりで辛い人生にもなってしまう。パパが聞いた時、理解が出来なかったとしても、心に話しかけることで、きつと先の人生に大きな気づきと、影響を与えることになる。おじいちゃんは、そう確信しているよ」

「僕も聞きたいな」

「よしよし。パパに言っておくよ」

「おじいちゃんは話してくれないの？」

「わしは・・・また、考えておく。腹が鳴った。晩飯の支度でもするか」

おじいちゃんは、話を切り上げるかのように、夕食の手伝いをして行った。

僕は、おじいちゃんの話の内容の半分もわからない。

でも、よくわからないけど、おじいちゃんの話が大好きで、心がとても落ち着く感じがして、心地が良かった。

そんな話をしたあとから、おじいちゃんは僕に、なぞなぞをよくするようになった。

「良和、熱を加えると形がなくなり、冷やすと固まる。どんな形にも変化するもの何かなあ？」

僕は首を傾げながら、考えた。

おじいちゃんは、立って手を洗って、また座って、またすぐに立って、コップを洗ったり、また座って、お茶を飲んで、また立って、手を洗ってニコニコして、そんな動作を繰り返して、冷凍庫から氷を取ってコップに入れ、僕にジュースを入れてくれた。

「わかった。水だ」

「そうじゃ。第二問じゃ。左右は対象。真ん中のラインには、ひとつしかない。中身は見えないが、存在していて、左右対称ではない。これなーんじゃ」

おじいちゃんは、右手で右耳を触ったり、左手で左足を触ったり、両手で目を触ったり口を触ったり、両手の指で鼻や首を触ったりした。

「わかった。人間だ」

「そうだ。第三問じゃ。このレタスは誰が作った？」

「わかんない」

「ふむ。この家は誰が建ててくれた？」

「パパ」

「ふむ。パパはお金を払ったが、パパが造ったのではないな？」

「うん」

「この机は誰が造った？」

「机やさん？」

「ふむ。机やさんが作ったのか、売ってくれたな」

「うん。」

「じゃ、この家の中でパパが作ったもの、ママが作ったもの、おじいちゃんが作った物、良和が作ったものはどれかな？」

「このなぞなぞは難しいよ」

「そうじゃな。難しいな。良和、また遊ぼう」

その夜、僕は不思議な夢を見た。

僕の心臓が話している。腸も胃もそれぞれに、何かをヒソヒソと話している。

その話の内容を聞きたくて、僕は耳を澄ますけれど、はっきり聞こえなくて、そうこうしていると、内臓の配置がみるみる変わっていく。

夢の中で、僕は吐きそうになり、心の中で『助けて』と叫んだ。

その瞬間、目が覚め、僕はたくさんの汗をかいていた。

朝、おじいちゃんが僕の顔を見て「良和、大丈夫か？」と聞いた。

僕は内心、おじいちゃんはエスパーかと思った。

今朝の夢のことをおじいちゃんに話すと、「逆夢じゃの」と言った。

なんでも、おじいちゃん言うには、健康な証拠だと。

その夜、おじいちゃんは僕を銭湯に連れて行ってくれた。

「どうじゃ。たまには大きな風呂で温まるのも気持ち良からう」

「うん。気持ちいいね。おじいちゃん」

「今朝の夢じゃが、気持ち悪かったか？」

「うん。とつても気持ち悪くって、吐きそうになったんだ」

「ハッハッハッ。今朝は顔色が悪かったの。夢とは面白いもんじやの。現実起こると困ることやら、現実なら良かったと思うこともある」

「なんであんな夢みたのかわかんないけど、気持ちが悪かったよ」

「そうよな。夢は気持ち良い夢がええわの。現実と紙一重よの」

「えっ？どういうこと？」

「現実でも夢であって欲しいと思うこともある」

「うん。なんとなくわかるよ」

「現実には内臓が席替えなんかしようものなら、えらいことになるわなあ」

「えらいどころじゃないよ。おじいちゃん！」

「ふむ。おじいちゃんならこう考える。心臓さん、血液さん、内臓の皆さん、わしが眠っておる間も、わしが何の指示をしとるわけでもないのに、わしの体を動かし、生きるために、働き続けてくれてありがとう」

「おじいちゃん、当たり前のことだよ」

「良和。おじいちゃんは良和の6倍以上生きとる。この歳になるとな、当たり前前のが、当たり前でなくなってくる。七十年以上、休む間もなく、心臓は動き続け、体が健康を保つように、細胞が頑張ってくれておる。体内は余分な物を排除し、必要なものを取り入れ、この体あつてのわしじゃ。また、わしが心臓を止めて欲しいと思つても、動いている。わしの体は生きたがつている。わしの体であつてわしの体でない。わしは生かされておる」

「なんだか、そう言われると有難いことだね」

「そうよ。良和。有難いことじゃの。見てみ。この銭湯の湯。沢山の水が出て流れて行きよる。それでも、水はなくならん。水だけなら夏は気持ちもええかもしれないが、冬はたまつたもんじゃない。火があるから、丁度いい温度に温められ、体が温められる。おじいちゃんはいつも、水の神様ありがとう。火の神様ありがとう。そう心で手を合わせながら、風呂に入つとるよ」

「じゃあ、僕もこれから、そう思つてお風呂に入るよ」

「おお。ええことじゃ。ええことじゃ。良和はええ子よなあ」

そう言つて、おじいちゃんは僕の頭をそつと撫でてくれた。

銭湯の帰り、おじいちゃんは僕の好きなアイスをコンビニで買つてくれ、食べながら家まで歩いた。

家に着くと、ママの顔がひきつれ瞬きもせず、顔色が真っ白に見えた。

おじいちゃんは、何かを感じたようで、ママの肩を抱いておじいちゃんの部屋に入つて行つた。

しばらくして、おじいちゃんはママと出かけるから、先に寝るよう僕に言って、タクシーでどこかへ行った。

朝、太陽が昇る少し前に、おじいちゃんだけが家に帰ってきた。

「おじいちゃん、おはよう。ママは？」

「おはよう。良和。今日は学校は行かなくていい。学校にはおじいちゃんが電話しておく」

「なんで？なんかあったの？」

「今から、病院へ行く」

「えっ？病院」

「良和、落ち着いて聞くんだよ。パパが昨日、病院に運ばれた」

僕は、声が出なかった。

「おじいちゃんがパパの着替えを準備している間に、身支度をしておくんだよ」

「わかった」

僕は、まだ夢を見ているのかと思いつながら、顔を洗った。

ママの昨日の顔、普通じゃないことは僕にもわかった。

その後のことは、僕は考えないようにしていた。

ただ、今、起きていること、これから僕が目にすることがどうか夢であるようにと、僕は心の中でずっと願っていた。

第2章 出来事は突然

病院に着くと、ママの肩は項垂れ、まるで別人のような、老婆のような顔にも見えた。

僕の姿を見つけると、ママは泣きながら僕を抱きしめた。

「ママ、パパ死んじゃうの？」

ママは話そうと、声を出す前に涙が溢れ、言葉にならなかった。

「みゆきさん、わしが話そうか？」

おじいちゃんがそういうと、ママはコックリと頷いた。

「良和や、屋上にでも行こうか？」

そう言っつて、おじいちゃんは僕と一緒に病院の屋上へ向かった。その日の空は曇っつていて、今にも雨が降りそうな天気だった。屋上のベンチで腰掛けながら、おじいちゃんは大きく息を一回吐くと、ゆっつくりと話し始めた。

「良和。パパな、仕事から帰る途中、交通事故に巻き込まれてな、どうも頭を強く打つたらしい。頭の中にたくさん血が溜まつつて、時間と共に血液が吸収されていくそうじゃが、まだ目が覚めん。少し様子を診て、治療するそうじゃが・先生を信頼するしかないの」

「パパは助かるの？」

「ふむ。今の時点では、五分五分だそうだ。助かったとしても、後遺症は残るそうじゃ」

「おじいちゃん。パパ、助かるよね。絶対に、また元気になるよね？」

「そう。そう信じよう。そうじゃ。そう信じるんじゃ。今日の天気はわしらの心を察してるかのようじゃの。これからは、ママも大変になる。わしも頑張るが、良和も手伝い頼むの」

「うん。僕、なんでもするよ。パパが元気になるなら、なんでもする。良い子でいるよ。そしたらきつと、パパは元気になつて帰つてきてくれるよね」

「そうじゃな」

そう言っつて、僕の頭を撫でながら、おじいちゃんは遠くの方を見ていた。

おじいちゃんは、涙は見せないけど、心の中で沢山、沢山泣いている。僕には、そう感じた。

「良和。ひとつ約束して欲しいことがある」

「うん」

「パパに会うときは、いつも通り、いつもの良和でいてくれな」

「わかった」

なんでも、意識がない状態でも耳は聞こえてるんだとか。

おばあちゃんが亡くなる前、おじいちゃんはいつも、おばあちゃんの手を握って、今日の出来事や、思い出話や、今まで言えなかった心の声を伝えてきたと言っていた。

しばらく空を眺めたあと、僕とおじいちゃんは、パパとママのところに戻った。

「みゆきさん、一回わしらも帰ろうか？昨日から何も食つとらんし、着替えもせなの」

「お父さん、ありがとうございます。もう少し、もう少しだけ、ここにいます」

「看病する側も大変じゃから。無理せんで、疲れが出んようにせなの」

おじいちゃんと僕は家に帰り、ママの着替えと食べ物を用意してまた、病院に向かった。

「みゆきさんも、今はまだ気が動転しとるが、しばらくすると落ち着くじやろう。病院には都度、行くようになるじやろうて、しばらくは、和良と二人の生活みたいなものよな」

「おじいちゃん、しばらくなの？」

「そう、しばらくな」

その日の夜、おじいちゃんは、うどんすきを作ってくれた。

一味を沢山入れて「辛い。辛い」と言いながらおじいちゃんは泣いていた。

僕はパパの言葉を思い出していた。

ママを助ける。ママの助けになる。おじいちゃんも助ける。

でも、いつたい僕は何をしたら良いのだろう・・

そう思いながら、うどんを啜った。

ベットに入っても、僕はなかなか眠れなかった。

僕は枕を持って、おじいちゃんの部屋へ行った。

「おじいちゃん、一緒に寝てもいい？」

おじいちゃんは、背中を向けて何かを見ていた。

振り向いて、おじいちゃんは「おいで」と言っただけで微笑んでくれた。

「おじいちゃん、何見てるの？」

「パパの子供ときの写真やら、作文やらを見とった」

「へー。パパの」

「あの子は子供の頃から優しくかった。学校でいじめられてる子がいたら、いじめっ子をやっつけに行ったり、病気で休んだ子供がいたら、学校の帰りにその子の家に寄ったり、捨て猫は拾ってくるし、怒る姿を見たことがない。道で老婆さんが荷物を沢山持つてると、僕が持つてあげるって、それで学校遅刻したり。心の優しい子で、わしは、誇りに思った。勉強なんてできなくてもいい。人として大切なものをこの子は持つておる。それだけで、わしは自慢の息子だと思った。だんだん大きくなって、将来は、人の役に立つような仕事がしたいと言うようになった。わしは嬉しかった。嬉しくて、この子の好きな人生を歩ませようと、これは駄目だ、あれは駄目だと一回も言わなかった。伸び伸びと成長し、大切な心を失わすことだけはしたくなかった。こんな優しい子が、なんで・・なんでこんなことに・・神様はおらんのかのう。一度会って聞いてみたいわの。わしら、なんも悪いことしとらんのに。どうして、あの子なんじゃ。わしの方が先は短いのに、なんでわしでなくあの子なんじゃ。代わってやれるものなら、代わってやりたい」

そんなことを僕に話すわけでもなく、ぶつぶつと独り言のように言っていた。

おじいちゃんと初めて一緒に眠った。

とても温かくて、静けさの中で、おじいちゃんの心臓の音が『ドクン、ドクン』と僕の胸に響き、なんとなく安心感を感じて、知らない間に眠っていた。

次の日、学校から帰るとママが帰っていた。

ママのご飯を、おじいちゃんが病院に持つて行って、きつと毎日そうなると、おじいちゃんいに悪いってママは言っていた。

朝の用事が済んだら、ママは病院に行き、夕方には帰って来る。そんな生活がしばらく続いた。

「みゆきさん、たまにはわしが病院に行くから、あんた少しゆっくりしなさったらどうじゃの？」

「お父さん。私、毎日、行きたいんです。ありがとうございます」

「そうか。無理のないようにの」

「はい。お父さん。私、こんなことになって・・初めて気がつきました。いつも、いつも好きなこと言わせてもらって、私があの人身の回りの世話してるつもりで、実際はそうなんです。でも、どれだけあの人存在に支えられ、どれだけ甘えさせてもらってたか。痛いほど身に染みて、あの人居てくれるから、私、好きな事して、好きなこと言えて、あの人存在の大きさを、こんなに大きな人だったなんて。なんでも包み込んでくれていた。こんなことにならないとわからなかったなんて、情けなくて」

「みゆきさん、ありがとう。なんとも良い嫁さんをもらったもんよの」

「えっ。そんなことはありません。私は情けなくて仕方がないので」

「みゆきさん、そんなもんじゃとわしは思うよ。ばあさんのとき、わしも同じ事を思った。わしが養つとるとでも思いよつた。じゃが、わしは、ばあさんに支えられてきたんじや。毎日、毎日、台所に立って、じゃがいもの皮を剥いたり、野菜を洗う時は冬は水が冷たい。足元から身体は冷える。洗濯物も今では便利になったが、毎日、毎日、洗い立ての下着が着れて、家族の健康を願い、夕食の献立を考え、文句や、愚痴を聞いたことがない。ばあさんの笑顔にどれだけ救われてきたことか。なんでもつとはよう気がつかんかったんやろうと、自分を責めた。もつと大切にしたら良かったと。何度も何度も悔やんだ。自分を責めて、悔やんであげく、わしはわかった。今、気づいた。それで良かった。ばあさんもそう思つとる。わしにはわかった。それでええ」

「そうなんですね。お父さんも同じ想いを・・」

「わしが気づいたとき、もうばあさんはおらんかった。それも運命やとするなら、受け入れて背負って行く。みゆきさん、しかし、あんたは違う。あの子はまだ生きとる」

「そうです。そうでしたね。お父さん。まだ、あの方は生きています。まだ、伝えられる事もできる。あの人に何をしてあげられるか、考えることもできますね」

そんなとき、家の電話が鳴った。

「はい。竜野です。はい。すぐ行きます」

電話は病院からだった。

パパの意識が戻ったという知らせだつた。

おじいちゃんとママは慌てず、大急ぎで病院へ向かった。

病室に入ると、パパは相変わらず眠っている。

ママは意識が戻ったっていう、自分の想像との違いに頭の中は真っ白になり、パパの手を握りながら顔を覗き込んでいた。

ママが「あつ。あなた」と声に出すと同時に、ママの目から涙がポロリとひとつこぼれた。

「お父さん、手が、手が握り返してくれました」

まだ、力は弱いものの反応を示したことが、どれほどの希望を与え、喜びだったか、おじいちゃんは知っていた。

おじいちゃんは、うんうんと頷いてパパの頭をなで、頬をさすり、足をさすり「ゆつくりでええ、ゆつくりでええ」と言っていたそう
だ。

おじいちゃんは先に家に帰り、僕が学校から帰って来ると、そんな病院での出来事を話してくれた。

その日、ママは僕たちが夕食もお風呂も済ませた後に帰ってきた。

「ママ、おかえりなさい」

「遅くなつてごめんね。夕食は？もう済んだ？」

「うん。おじいちゃんと一緒に食べたよ」

「よっちゃん。今日、ママと一緒に寝よつか？」

一瞬、僕は『ギョエ』と思ってしまった。

もうすぐ中学生になるのに、ママと一緒に寝るだなんて、なんだかカッコ悪いような、でも、嫌だとママには言えなくて、その夜、枕を持ってママの部屋に行った。

「よっちゃん。今日、パパね、ママの手を握り返してくれたのよ。ママ、嬉しくて嬉しくて、もう、あのままかもしれないって思っていたから、パパが言葉をまだ話せなくても、ママが来たことわかってきている。それだけで、本当に嬉しかったの。パパ、絶対にママの話を聞いてくれると思つたから、沢山、沢山お話しをしてね、それで帰ってくるの遅くなつちゃった」

「そうなんだ。パパとどんなお話をしたの？」

「そうね。ママが最初にパパに伝えたかったことは『ありがとう』だったの。パパが、ママをお嫁さんにしてくれたこと、いつもママの好きなように、ママがいつも笑顔でいられるように、パパがいてくれたから、そんな毎日が幸せだったんだって気づいたの。だから、パパに沢山のありがとうを伝えたの。そして、良和って宝物を授かったこと。数えればキリがないくらいの幸せに、沢山気づかせてもらえたこと。そんな話をずっとパパに聞いてもらっていたのよ」

「そうなんだ」

僕はママの話を聞きながら、今にも眠ってしまいそうで、実際、半分は眠りながら聞いていた。

その日の明け方、僕はこんな声を聞いた。

それは、心の奥の深いところからこう聞こえた。

『ありがたいことね。幸せ。幸せ。ありがたい』

昨晚、ママからそんな話を聞いたから、僕はそんな夢を見ていたのか、眠りながらママが話していたのかと、気にも留めなかった。

朝、起きると、ママは台所に立って、朝ご飯の用意をしてくれていた。

「よっちゃん、おはよう。今日はママが朝ごはんを作ったわ。さ

あ、しつかり食べて学校に行つてちょうだい」

「うん。ママありがとう」

と言う僕の顔は、鳩が豆鉄砲をくらったような顔でぼーぜんとしていた。おじいちゃんは僕の耳もとで、「明日は、わしは、雨を降らせて欲しくないんじゃないか」とポツリと呟いた。

それ以来、毎日ではないが、ママはおじいちゃんより早く起き、朝ご飯を作ってくれた。

おじいちゃんは、朝は自然と目が覚め、台所に立つことは苦痛でも何でもないと言っていた。ママが台所に立つ日は、部屋で寝ないでリビングのソファで寝てるんだと言っていた。

僕は、大人の世界ってあんまりわからないと感じたが、少しだけわかるようにも感じた。

それから一週間ほど経った頃、僕はママと一緒にパパに会いに行った。

僕が初めて病院でパパに会った時は、口に管を入れていて人工的に呼吸をしていた。

もう、それは外されて、パパは自分で呼吸をしていた。

僕は、最近の出来事、学校での様子や中学に入ってから、部活を何にするか、朝食をママが作ってくれる日がある事など、パパに話した。ママは、「そんなことまでパパに言わなくてもいいの!」と言って、僕の肩を軽く叩いた。

僕とママが笑っていると、パパの顔も笑っているように見えた。

ママがパパに顔を近づけて「じゃ、よっちゃん宿題やらあるし、今日は帰りますね。明日、また来ますから」

そう言って、病室を出ようとした時、パパの目がうつすら開いた。

「パパ!」

僕がそう言ってママの顔を見ると、ママは本当かどうか確かめるかのように、パパの目の中を覗き込み「開いて、開いて、もつと開けてちょうだい」と呟っていた。

一瞬の出来事のように、その瞬間はとてもスローモーションのように、時が止まっているような感覚だった。

そして、時が動いた瞬間。ママはナースコールを押しながら「パパ、パパ!と叫んで泣いていた」

看護師さんが病室に入った瞬間、先生に連絡しながらパパの状態を診てくれていた。

パパは目をキョロキョロさせ、自分がどんな状況であるかを確認するかのような視線で周りを見ている。

先生が病室に入り、聴診器やらで胸の音を聞いて、パパに話しかけている。

「竜野さん。竜野さん。わかりますか?」

すると、パパは小さく頷いた。

ママは僕の肩を強くギュつと掴みながら、目を大きく開けていた。

先生は「奇跡ですね。今後の治療方針などについて、後日、また」と言って病室から出て行った。

「あなた。わかる?私のこと」

「わかるよ。みゆき、良和。わかるよ。僕はどうやら入院しているらしいね」

「そう。入院してるのよ。ひと月と少し前から・・・」

「わー。そんなに眠っていたのか・・・」

「そうよ。ぼちぼち起きてくれないとね」

そう言って、ママは泣きながら笑っていた。

パパは、何故、入院しているのか、はつきりと理解できていない様子で、自分の今の体の状態も理解できていなかった。

ママはおじいちゃんに電話をすると、僕は一人で先に家に帰ることになった。

おじいちゃんは、家の近くのバス停まで迎えに来てくれた。

「良和、今日はおじいちゃんと夕食を外で食べて帰ろうか？」

「やったー。何食べさせてくれるの？おじいちゃん」

「お好み焼きはどうじゃ？」

「うん。僕、モダン焼きとオムそばがいい」

「よしよし、そんじゃ行こう」

おじいちゃんも何だか嬉しそうな感じだった。

おじいちゃんはニコニコしながら、僕が食べてるところを見た。

「おじいちゃんは食べないの？」

「食べてるよ。昔ほど沢山も食べられんからの。こうやって美味しそうに食べてる良和みとると幸せじゃ」

そう言っつて、おじいちゃんは少しつまんでは、減多に飲まない日本酒を一合、熱燗で啜っていた。

「おう。温もった。温もったわい。良和、家までプラプラ歩いて帰ろうか」

そうして、おじいちゃんと一緒に歩いて帰ることになった。

僕は心の中で『帰りにコンビニに寄って、僕の好きなアイスを買ってくれたらいいのになあ』と思った。

そう、思っているのなら、そうおじいちゃんに言えればいいのにつて、思うもう一人の自分があるんだけど、何だか甘えていいのか？厚かましくないか？そう思う自分と、絶対にそうなつて欲しいわけでもない自分と、この先の展開を楽しんでいる自分を自分で見ながら、楽しんでいる僕がいることに気がついた。

コンビニの近くに差し掛かったとき

「良和、何か欲しいものあるか？」

と、おじいちゃんは聞いてくれた。

僕は待つてましたと言わんばかりに頷いた。

おじいちゃんは、「あのアイスじゃな」と言っつて笑っていた。

「おじいちゃん、ありがとう」そういうと、おじいちゃんはこんなことを僕に言っつた。

「してあげる喜びと、してもらう喜び。このバランスはとても大切じゃ。人はして欲しいと思うばかりの人間もおれば、してあげたいと思うばかりの人間もおる。大抵の場合、してもらったら、その半分は返そうと思うのが普通の人間。してもらったことを倍以上にして返そうと思う人間もいる。してあげてうちに見返りがないと『して差し上げる』が『してやってる』に変わる。自分の心をいつも平穩に穏やかに保っていたければ、それ以上しないことじゃ。それで人を駄目にしてしまうこともあるから難しい」

「うん。おじいちゃんの話は難しいよ」

「ハッハッハッ。そうよな。良和のママはそれを知つとるよな」

「何で、おじいちゃんそんな事を？」

「ふむ。わしは、ばあさんも家の用事をしたくない時もあったと思つとる。でも、何も言わんやった。時代という言葉で片付けられればそれまでじゃが、ママは朝ごはんも作りたい時に作って、晩御飯も作りたくない時は、わしに頼むか、何か買ってきたりだな、何につけ押し付けがましくないのよ。私は好きでやっています。つて感じじゃの」

「へー。僕にはよくわかんないけど、ママはいつも笑ってるし、学校で嫌なことがあっても、すぐ忘れるのはママのお陰かもしれないね」

「きつと、パパもそう思つとると、おじいちゃんは思う」

「おじいちゃん、もう少し僕が大きくなったら、おじいちゃんのこと言ってること、少しはわかるようになる？」

「なるなる、頭ではわからんでも、心ではわかつとるよ」

「そうなんだ」

と言いながら、本当にわからない。と、僕は思った。

ママは、パパが目を覚ました日、結局、病院に泊まった。パパと一緒にいたいと思う気持ちと、パパが不安なんじゃないかと思う気持ちがあつて、パパの隣で寝たらしい。

「私が側にいるからつて、どうにかなるもんでもないのでしょうが、パパの側にいたかつたんだよね」と、ママはこんな言い方をよくする。

「みゆき、ここは何処の病院？」

「京都大学附属病院よ」

「そんなに悪かったの？」

「てか、あなた、受け入れ先がここしかなかったんじゃない？」

「・・・」

「まあ、ひと月以上も意識がないのと一緒にですから、軽くはないですがね」

「そうか。ひと月以上も・・・」

「で、思い出せました？」

「そう。思い出してるんだけど、子供が交差点で飛び出してきて、慌ててハンドルを切ったのは覚えてるんだけど、あの子供、大丈夫だったかな？」

「さあ。どんな子供かしりませんが、誰にも当たったり、ひいていないから、大丈夫だったんじゃないやありません？」

「そうか。それなら良かった。何だか、夢を見ていたよ」

「まあ。どんな夢？お花畑があつて、川の向こうで誰かが、おいでおいでって手をこうしてたなんて夢ですか？」

「まあ、そんな感じの夢であつたような・・・なかつたような。でも、あつちの世界つてあるのかもしれない」

「えーっ。あなた、本当に見てきたの？」

「見てないよ。見てないけど。おふくろの夢を見た」

「それで？お母さんなんて仰ってました？」

「手を『シッシッ』としてね。あつち行けみたいな。せつかく会えたのに、それはないよな。と思つてたら、父さんがまだ居るから。みたいな事言つて」

「はーん。あなた、おい返されたのね」

「えっ。ほんとに？」

「そうよ、夢ってね、魂のお里帰りとか言うじゃない。実際、あなたは普段の睡眠と違ってるんだし、お母さんがまだ来るなって追い返してくれたのよ」

「何だか、それがほんとだとして、俺はまだ生かされてるってことか・・・」

「そうね、まだまだ良和もこれからだし、せめて良和が成人するまでは、頑張っていたいただきますよ」

「おいおい、成人するまでなんて言わずに、結婚して孫の顔を見るまで頑張らせて下さいよ」

「はい。では、それまで元気で働いて、せっせつと稼いできて下さい」

「かしこまりました。奥様」

「また、あなたとこんな冗談が言えるなんて、本当に夢のようで、あなた、本当によく目を覚ましてくれたわね。お母さんにも感謝しなくちゃね」

「ああ、本当だ。心配かけてすまなかった」

「私ね、あなたがこんなになつて、初めて色んなことに気付かされて、私、これからね、ちゃんと言葉にして気持ちを伝えていこうと思ったの」

「うん。そっか」

「あなた、私ね、いつも、お仕事頑張ってくれてるのに、汗臭いか、足臭いとか言つてごめんね」

「今、それ言うところ？ま、いいけど、聞きますよ」

「それよ、それ、いつも、あなた、私のどんな話でも聞いてくれて。嫌な顔ひとつしないで、聞いてくれたなあって、しみじみ思ったのよ。甘えさせてるふりして、実際は私が甘えさせてもらっていたこと、よくわかりました。いつも、いつも、ありがとう」

「いや。ただ僕は君の話を聞くのが好きなんだ。オチが別にあるわけじゃないんだけど、何だか楽しいんだよね。それに、僕だって甘えさせてもらってるよ。いつも、ありがとう。少し、眠るよ。ちよつと疲れたかな」

「そうよね。眠って。おやすみなさい。疲れが取れたら戻ってきて下さいね」

「はいはい。おやすみ」

こんな会話があったことは、僕がもう少し大人になってから知った。

次に病院に行く時、ママとおじいちゃんは、先生とお話をするって言っていた。

僕は学校に行っていたが、早く帰ってパパのとを聞きたかった。ママもおじいちゃんも大変だったけど、僕は僕なりに色々大変だったんだ。

こんな時に、どうしたらママを助けられるか、考えても考えてもわからない日々が続いて、結構モヤモヤしていた。

僕はまだ子供で、学校へ行かなきゃいけないし、お金を稼ぐことも出来ない。どうすれば、ママを助けられるだろう・答えが出ないまま、時間だけが過ぎていた。

ある学校の帰り道、同じクラスの友達が、今日は私が夕食を作る日なの。そんな、話をしてくれた。なんでもその子の家族は、その子が小さい時に、両親が離婚していて、お母さんが残業の日は、妹と三人分の晩御飯を作るらしい。

僕は感心して、すごいなって。お母さんも帰ってご飯が出来ていたら、助かるだろうな。

そう思った時、これだ!!と僕は感じた。今の僕に出来ること。ママを笑顔にすること。助けるって言ったら大袈裟な感じがするけど、ママを笑顔にすることは、ママを助けることなんじゃないかな。

僕は、家に帰っておじいちゃんに僕でも作れる料理を教えてくださいとお願ひした。

おじいちゃんはとても喜んで教えてくれた。僕にでも簡単に作れる料理。最初は、クリームシチューを教えてください。煮込んで野菜が柔らかくなったら、ルーを入れるだけだから簡単だと、おじいちゃんは言っていた。

野菜を切るのは少し難しかったけど、分量を間違えなければバッチリ出来る。

ついでに、少しコンソメを入れて野菜を煮込むとコクが出て、美味しくなるとおじいちゃんが教えてくれた。

野菜サラダを作って、バケットを盛り付けて出来上がり。

思った以上にママは大喜びしてくれた。

こんな事で喜んでくれるなら、僕はまた作ろうと思った。

おじいちゃんにもっとたくさんさんのメニューを教えてくれるようにお願いしたら、二つ返事で喜んでくれた。

学校が休みの日、僕は料理をするようになった。

お昼ご飯にチャーハンを作る時であれば、晩御飯にカレーを作ったり、僕もレパートリーが増えていく事がとても楽しかった。

ある時ママが「よっちゃん、大助かりよ。ありがとう」と言ってくれた。

『大助かり』この言葉を聞いて、僕は助けになっているんだ。そう感じた瞬間だった。

この時から、助けるって事が何となくわかってきたような気がした。

学校が終わって、宿題が終わると、僕は洗濯物も取り入れて畳むようになった。

ママは外で遊んできていいよって言ってくれるけど、僕は遊ぶことより、ママを助ける方が僕が嬉しかった。

おじいちゃんも言った。

「家のことはおじいちゃんもいるから、遊んでおいで」

僕は、ママとおじいちゃんに気持ちを伝えた。手伝いが好きだと。

おじいちゃんは好きなようにしたらいいが、遊ぶことも大切だよって聞いた。

僕の仕事は、勉強と遊ぶこと。

そうおじいちゃんは言うけれど、僕の仕事は、学校と外で遊ぶこと、そして、ママとおじいちゃんの手伝い。

全部を両立させるために、家に帰ると一番に宿題をさっさと済ませるようになった。

時間を決めて、夕方五時には家に戻り、ママやおじいちゃんの手伝いをする。

僕の仕事は、台所の後片付けや、お風呂掃除など少しずつ増えていった。

数ヶ月が過ぎ、パパの退院の日がきた。

まだ、パパは歩けなくて、病院でリハビリも頑張ったんだけど、退院して家からリハビリに通うことになった。

パパが戻ってくる前に、家の中はバリヤフリーになり、トイレに手すりがついたり、おじいちゃんの部屋がパパの部屋になったり、パパが帰る直前まで、結構、めまぐるしく時が過ぎていた。

パパは家に入ると、胸いっぱい家の中の空気を吸って、ゆっくり息を吐くと「ただいま」と言った。

誰に言うでもなく、まるで、家や家具や空間に伝えてるように優しく、しみじみとそう言った。

ママは「おかえり」と優しく微笑み、おじいちゃんは「どうじゃ、久しぶりの我が家は」と嬉しそうに髭を触っていた。

「あー。帰ってきた。今、この嬉しさを噛み締めてるよ。うちはこの匂いだったんだ。毎日いるとわからないけどね」

そして、久しぶりの家族揃っての夕食が始まった。

パパもママもこう言った。

「こんなに嬉しいこと。家族が揃って、笑顔でご飯を食われて、今まで涙って、悲しいときにしか出てこなかったけど、嬉しくても涙ってこんなに出るんだ」

「二人とも、年をとったの。生きてると、知らず知らずに強くなり、辛いこと、悲しいこと、悔しいことは余程でない限り、泣かなくなつて、嬉しいこと、感動することで簡単に涙が出るの」

おじいちゃんは鼻をグスグスさせてそう言った。

「一階にこんなに手すりを付けてくれてありがとう。明日から頑張つてリハビリ頑張るよ」

「あなた、明日からと言わず、今晚から頑張ってくださいね」

ママはわざと意地悪な顔を見せた。

「おいおい、帰つて早々、リハビリも結構辛いんだ。今日は勘弁してくれよ」

そう言つて、笑いと涙が溢れる忘れない日となった。

僕は、こんな日々がずっと続くと思っていた。

ママもそう思っていた。

パパが歩けるようになって、仕事に復帰して、またパパが入院する前の生活に戻っていくと、誰もがそう思っていた。

ある時、お風呂に入ったパパは、なかなか出てこなかった。

ママもおじいちゃんも、遅いねって言つてたけど、一人でお風呂に入れるようになって、嬉しくて長風呂を楽しんでるんだろうと思つていた。

「ちょっと長過ぎない？私みてきますね」

そう言つてママがお風呂場を開けると、パパがお風呂の中で倒れていた。

直ぐに、救急車を呼んで、病院に向かったけど、パパの心臓は動いていなかった。

パパは二度と戻って来なかった。

僕の名前をもう呼んでくれることもない。

ママと言葉で遊んで、冗談を言って笑うこともない。

杖をついて、やっと歩けるようになった、もう少し頑張れば、お仕事にも行けると思っていたのに。

明日の夕食は、パパも一緒に作るって言っていたのに。

大きくなって、好きな人ができたら、真っ先にパパに相談するって言っていたのに。

好きな人の口説き方も教えてくれるって言っていたよね。

お酒の飲み方も、教えてくれるって言っていたよね。

このまま死んじゃったら、パパ嘘つきになっちゃうよ。

そんなパパは嫌だ。

パパ、戻ってきて。戻ってきてよ。

それから数日、パパのお葬式も終わり、ママはあまり喋らなくなつた。

いつも、仏壇の前に座り、目の周りが涙でかぶれるほど泣いていた。

おじいちゃんはぼちぼち納骨をせないかんと言っていたが、ママは嫌だと首を縦にはふらなかつた。

僕もおじいちゃんもママにどう接したらいいのか、なんて言葉を掛ければいいのかわからず、ただ時が流れた。

「みゆきさん、何か口にしないと、あんたまで身体を壊してはいかんよ」

おじいちゃんがそう声をけると、どこを見ているのかわからない視線だけれど、ゆつくりと、少しづつ、ご飯を口に運ぶようになった。

それから、月日は流れ、僕は高校生になった。

勉強は難しくなり、将来のことも考えるようになった。

パパと同じ消防士の仕事に憧れを持っていたが、そうしようと強い意思もないまま、大学に行くか就職をするか選択に迫られていた。

ママは人が変わったように、無口になり、おじいちゃんは時が解決してくれると言っていたが、パパがいた頃のような、明るくて、元気いっぱいママには戻らなかつた。

僕は、いろんなことを、おじいちゃんに相談するようになっていたが、おじいちゃんは、パパと似ていて、黙って僕の話聞いてくれるだけで、どうしたいか、どうするかは自分で決めなさいって、いつも話が終わってしまう。

家の中に大きな穴が空いたまま、僕は就職することを決め、結構、大手の企業から内定をもらった。

僕は僕の人生を歩きながら、このまま、この家にいるのがいいのかどうか、考えるようになった。

ほんとのところ、自立心が芽生えて、僕は家を出て一人で暮らしたいと思っていた。

でも、ママやおじいちゃんのことを考えると、直ぐに行動に移せるわけでもなく、また時は静かに過ぎて行つた。

僕は仕事を覚えることが多く、忙しくて、家には寝に帰ってくるだけの生活になった。

ママやおじいちゃんとも話す機会が減り、それぞれが一緒にいて、バラバラのようにも感じた。

第3章 初めての恋

仕事は順調で、楽しく、たまに失敗して、上司に叱られる時もあるが、まだまだ新米だから仕方がない、次、頑張ろうと、意欲に燃えていた。

そんな、ある日、取引先の受付の女性に、僕は一目惚れをした。なんで、こんなに惹かれるのかはわからない。

どうにかしたいとかの要求は何もなく、ただ、惹かれる。ただ、会えるだけで嬉しくて、それだけで毎日が楽しかった。

仕事に集中している時以外、その人のことばかり考えていた。考えているというより、頭の中にいつもその人がいる。

目を閉じてても、もちろん、目を開けていても、その人が頭の中を占領していた。

そんなある時、僕に微笑みかけてくれたことが嬉しくて、ひよつとして、あの人も僕に気があるんじゃないかと思った。

そうは思うが、いや、待て待て、それは錯覚つてやつか?と思いつながらニヤニヤしていた。

そんな楽しいことが続くと、仕事も順調で、大きなプレゼンを任されたり、俺つて、もしかして凄いかも。

出世街道まっしぐら?なんてことも頭をよぎった。

そんな矢先、僕は初のプレゼンに、大事な資料を忘れてしまい、頭の中が真っ白になった。

ちよつと、調子がいいからつて、調子に乗り過ぎたのか!だが、どうすることも出来ず、かと言って、このまま引き下がるのもごめんだ。

僕は、正直に、資料を忘れたことを、謝罪し、資料は後日届けるが、今日は僕の頭の中に入っていることだけで、話を進めていただけないかと頼み込んだ。

すると、先方の人柄も幸いして、僕を正直で面白い人だと、僕の提案を受け入れてくれ、僕は頭のコンピューターをフル回転させた。

白板と、マジックペンを借りて、ありつただけの記憶をホワイトボードと言葉でぶつけてみた。

感触は悪くはなかった。

資料が届き次第、もう一度精査して、検討すると返事をもらえただけで、僕は上出来だと自分で自分を褒めた。

その時は、必死だったけど、内心は、とても不安だった。

でも、何故だか、結果がどうであれ、達成感と、少し成長できたような気持ちでいた。

そんなことを考えながら、受付を通り過ぎようとしたころ、あの女性が、僕に何か言いたげな顔をしているように感じた。

ん？気のせいかな？なんだ？

気のせいだよ。という頭の声を無視して、僕は、受付に近寄った。

「何か？僕の顔についてます？」

「はい」

なぬ？この展開はなんだ。

僕はてっきり、『前からあなたのことが気になってまして、もし、よろしかつたら、今度、お食事でも・・いえ、急にすみません。突然で、驚かれますよね？連絡先だけでも教えて頂けませんか？』なんて、言葉を期待していた。

そりゃ、受付に座っているとはいえ、彼女は今、仕事になわけて、そんなこと言っただけはさすがない。

すると、彼女はクスクスと笑い「頼にマジックが・・」と言って、ちり紙を手渡してくれた。

「あつ。そうですか。ありがとうございます」

「化粧室はあちらです」

と言われ、僕はトイレに駆け込んだ。

顔には赤いマジックが『シャ』とついていた。

赤や青のマジックを両手に持って、ホワイトボードに書いている時についたんだ。

あの時は、必死だったから気付かなかったんだ。

僕は恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。

きつと、いや、絶対に変な奴だと思われている。

あー。僕の儂い恋ゴコロもこれで終わりだ。

そんなことを思いながら、マジックを擦るが消えない。

石鹸で顔を洗ったが、薄くなっただけで消えはしない。

もういいや。恥はもうかいてしまっている。

一応、お礼だけは言っただけか。

そうして、僕は、もう一度受付に戻ると

「ありがとうございます。教えていただいて。知らずに帰るところでした」そう伝えた

「完全には消えませんでしたね」

そう言って彼女は笑っていた。

おかしい奴だと思つて、笑つているのか、僕の顔がおかしくて笑つているのか、なんだかわからないけれど、早くその場から立ち去りたかった。

帰り道、僕はニタついてる自分に気がついた。

出来事は、恥ずかしかつたけど、初めて話せたこと、笑つた顔が可愛くて、今日は色んなことがあつたが、楽しかったと足元は小さくスキップしていた。

その夜、僕は小さな欲求を覚えた。

あの人と、話したい。食事に行つてみたい。

できることなら、友達になりたい。

そう感じている僕がいた。

そんな感情に気がつくとき、どうすれば、それが現実になるのか。

そんなことを考えてると、なかなか寝付けず、頭の中は渦巻きがぐるぐる回っている。

「あっ！」

僕は、閃いた。そう、今日のことを口実に食事に誘おう。

ありきたりだけど、ドラマでもよくある展開だ。

このきっかけを逃す手はない。

その夜、僕は頭の中でシミュレーションをし、ニタつきながら眠りについた。

次の日、プレゼン用に準備した書類を、上司は郵送でいいと言つたが、僕は直接お会いして謝罪と同時に手渡したいと上司に言つた。

上司もその方が誠意が伝わると言い了解してくれた。

先方に書類を届け、受付を通り過ぎるとき

「先日はありがとうございます」

そう言つて、お礼にハンカチの包みを手渡した。

彼女は、「お礼だなんて」と言つていたが、気持ちだからと押し付けて帰つてきた。

気持ちを伝えるつて気持ちがいいなあ。なんて考えながら、僕はまた、小さくスキップしながら、会社に帰つた。

帰社すると、中のいい同僚に「何か良いことでもあつたか？」と言われたが、「いいや」と言いながら僕の顔は、きつとニヤけていただろう。

久しぶりに、早く仕事が終わつたから「ちよつと行こうぜ」と、その同僚は僕を誘つてきた。

平静を装つて、僕は「あ、うん」と返事したが、絶対に何か聞かれる。

案の定、同僚は僕に聞いてきた。

「竜野、嬉しいことは、分かち合おうぜ。いつたい、どんな良いことがあったんだよ」

「バレてるよね。僕は、すぐ顔に出るからね」

そう言って、プレゼンがあった日以降のことを話した。

「おまえ、バカだな。ハンカチだけ渡して、そんで帰ってきたわけ？タイプなんだろう？もつとグイグイいけよー」

僕は、人の話は最後まで聞こうよ。と思っただけど、結構、お酒入ってるし、仕方がないかと思い、ドヤ顔でこう言った。

「僕はちゃんとやったよ。ハンカチと一緒に、お礼に今度お食事を馳走させてください。って書いて、スマホのIDも書いておいた」

「やるじゃん。でも、彼女から連絡あるまで、なんだか待ち遠しいな。連絡、してくれるといいな」

この同僚は、結構、昔でいうところの肉食系男子って感じで、行動力があって、かなわないって思うこともあるんだけど、友達想いでいい奴なんだ。

そう、実際、彼女から連絡があるかどうかなんて、わからない。ないかもしれない。

でも、行動できた。気持ちを伝えられただけで、僕は結構満足していて、嬉しかった。

数日、仕事が忙しく、結構、疲労困憊気味で、少し有給でも使ってゆつくりしたいと思っていた頃、彼女からLINEが来た。

忘れていたわけではないが、考えてる余裕と時間がなかった感じで、不意の出来事に一気に気分が高揚した。

LINEの内容はこうだ。

「竜野さん、この間はご丁寧ありがとうございます。お礼にハンカチを戴いているのに、お食事までよろしいのでしょうか？」

これってOKなことじゃん。

なんで、急に関東弁？
て、僕の心は春の陽だまりの公園で、そよ風に吹かれながら、ベンチに座り、噴水を見ながら、僕の大好きなアイスを食べてる気持ちで、『お食事までいいのでしょうか？』って。いいんです。いいんです。いいのに決まっていますー。と空に向かって叫んでいる。

心の中で叫びながら、ガッツポーズをして、きつと、僕の顔は自信と希望に満ち溢れた漫画の主人公みたいになっているだろう。

すかさず、同僚が突っ込む。

肘で、僕を突きながら『やったな』って顔で歯茎を見せて笑っている。

もう、僕のウキウキは止まらない。

もうすでに、彼女とデートしているシミュレーションを何回もして、初めての食事は何十回目かのように感じるかもしれない。

お互いの都合がなかなか合わず、実際に食事に行けたのはそれから一ヶ月後のことになった。

ある日曜日の昼に、僕は彼女と待ち合わせをした。

何回か、LINEのやり取りがあり、彼女は野菜と魚が好きだとわかった。

色々考えた挙句、ちゃんこ鍋を食べに行くことにした。

そんなに気取った店でもないし、野菜も魚もたくさんあって、ニクの効いた鶏のつくねが、最高に美味しい。

彼女の名前は藤田さん。藤田玲奈。なんて素敵な名前なんだ。

あまり会話が弾んだわけではないが、会話がなくてもなんとも思わず、彼女といると落ち着く、というか、安心感がある。

時が止まったようにも感じ、二時間や三時間はほんの数十分に感じた。

胸がときめくというよりは、一緒にいて心地がいい。

僕自身、カッコつけなきやとか、いい人に見られたいとか、そんな気持ちは少しもなく、ただそのままの自分で、自然体でいられた。

本当はそのあと、美味しいケーキでも食べに行きたかったが、彼女は用事があると言って帰って行った。

家に帰ってから、彼女からLINEが来た。

「今日はごちそうさまでした。ありがとうございました」

とても礼儀正しくて、本当に感じの良い女性だと胸の辺りが暖かくなるのを感じた。

僕と同級生や同僚たちは次々と結婚して、子供を授かって、家庭を築いている。

だが、僕は、結婚にあまり興味がなかった。

なぜだかは僕自身わからなかった。

玲奈さんとは、その後、たまに食事に行ったり、映画を見に行くようになった。

これって、恋人？友達？って思う時もあったが、そんな定義付けはいつでも良かった。

また、彼女も何も言っでこなかった。

肉食系の同僚は、それではダメだと僕に言うが、たまに会って食事をしたりするだけで、僕は十分満足していた。

同僚から言わせたら、僕のそういう所がじれったいらしい。

きつと、彼女もそう思っている、このままだと他の男に持っていかれると言うけれど、僕の心が動かないからどうしようもない。

それからしばらく、玲奈さんからの連絡は途絶えた。

僕が最後にLINEしたのは、二週間前に映画観に行きませんか？と誘ったきり、返事がない。

僕は嫌われたのかとも・・・と思ったが、何かあったんじゃないかと心配になった。

仕事が落ち着いてる時期に、用事はないが、会社に用事があるフリをして、玲奈さんの勤めてる会社に向かった。

彼女が受付に座っていないのは、入り口に入る前にわかった。どこか具合でも悪くなったのか心配で、僕はLINEをした。

でも、彼女から、返事は来なかった。

それから4〜5日して、深夜一時を過ぎた頃、LINEの音が鳴った。

彼女がこんな時間に連絡をするなんて、何かあったに違いない。

僕は、LINEの返信をする前に、電話をかけた。

「どうしたの？」

「ごめんね。こんなに遅くに」

「それはいいけど、連絡が来ないから心配したよ」

彼女の声は夜だからか、何となく元気がないように聞こえた。

「竜野くん。今から会えない？」

「え！今から？」

「ごめん。迷惑よね。ごめんね」

「いや。大丈夫。ちょうど眠れなかったし。すぐに行くよ」

そう言っつて、僕は彼女の家の近くの駅のターミナルへ向かった。

彼女はすでに来ていて、薄明かりの街頭の下で立っていた。

「ごめんね。竜野くん。こんな時間に」

「いいよ。いいけど、何かあったの？」

彼女は、しくしくと泣いていて、僕が顔を覗き込むと僕にしがみついて声を出して泣き始めた。

しばらく彼女の肩を抱きながら、少し落ち着くのを待った。

彼女は泣き止むと、「優しいね。竜野くんは」

そう言っつて、涙を拭った。

「いや、うん。ほっとけないし。こんな時間に、なんかあったんには違うし」

「何にも聞かないの？」

「うん、聞きたい気持ちもあるけど、話したくなったら話すだろうなあって思ってた」

「ありがとう。あのね・・・」

「うん」

「どこかお茶でも飲みに行かない？」

「え？あ。うん。いいよ」

そうして、僕らは深夜遅くまでやってるファミレスに行ってお茶を飲んだ。

彼女は、何も話さなかった。

そして、ポツリとこう言った。

「なんで、生きてるんだらうね」

「えっ？難しいこと聞くね」

僕は答えられず、苦笑いしながら、「なんで、だらうね」としか言えなかった。

そんな言葉を言うなんて、よほど辛いことがあったのかと僕は思ったが、そのあと言葉は出て来なかった。

「竜野くん。私のこと好き？」

「うん。好きだよ」

「私もよ。私も好きよ」

なんなんだ、この展開は。僕の頭の中は半パニック状態で、今、何が起きているのかわからなかった。

そんな混乱した、僕の脳とは逆に僕はこんな言葉を言っていた。

「玲奈さんは、今、理由はわからないけど、なんか辛いんだよね。その原因を僕は知らないし、無理に聞こうとも思わない。けど、そんな辛い時に、僕に連絡してくれたこと、嬉しかったよ。僕でも

頼ってもらえてる気がして。嬉しかった。僕は何も力にはなれないかもしれない。でも、玲奈さんが、辛いとき、一人でいたくないとき、僕は側にいるよ」

彼女はまた泣いてしまった。

一瞬、僕は『しまった』と思ったけど、彼女の隣に座り、優しく肩を抱いた。

次の日、僕は、よく遅刻しないで出社できたと、自分ながら偉いと思った。

同僚は僕の異変に気づいたらしく、上目遣いでこう言った。

「おー。さては、昨日は朝がえりですか？それとも、会社に直行？」

「そんなんじゃないよ。ちょっと、眠れなかっただけだよ」

そう言ったものの、実際ほとんど眠れなくて、その後、彼女との距離は急接近した。

昨日、彼女が言った「なんで生きてるんだろうね」って言葉が僕の心にずっとひっかかっていた。

それから、仕事が休みの時は、図書館へ行ったり、気になる本があれば、本屋へ行ったり、哲学的なことから、精神世界のこと、歴史や宗教、神社なんかについての本をたくさん読んだ。

どうしたいのか、何を知りたいのか、僕にはわからない。ただ、「どうして生きてるの」って、その答えを僕は探しているような気がした。

僕と玲奈さんは休みの日、都合が合えば会うようになり、いろいろな場所へ遊びに行った。

僕はきつと、この人と結婚するんだろうと感じていたし、きつとそうしたいと僕は願っている。

あの日、何があったのか、僕は今でも知らない。けど、今、彼女が幸せで、笑顔でいてくれるだけで、それだけで幸せだった。

どんな関係も、親子でも、夫婦でも、友達でも、その二人の間にあることは、他の人には計り知れないものがある。

僕は、彼女といるときは、一心同体のような、なんとも不思議な感覚を覚え、離れることとか、別れることとか、そんなことは考えられない感覚。人が水や空気がないと、生きていけないようなそんな、言葉では表しにくい、不思議な感覚を感じた。

この時、僕は、初めて、母さんが、父さんの仏壇の前でなきで、泣いていた日々を少し理解できたような気がした。

ある休みの日、僕は図書館の帰りに百貨店の宝石売り場で指輪を見ていた。

「贈り物ですか？」

店員さんが話しかけてきた。

「婚約指輪って、月収の何倍でしたっけ？」

店員さんはニッコリ微笑んで

「昔はそんなこと言いましたけどね、今は気に入ったお品を選ばれる方が多いですし、ご自分でデザインしたり、造ったりされる方もおられますよ」

そんな話を聞きながら、僕は彼女のイメージにぴったりな指輪を見つけた。

「これ、これにします」

サイズがわからなかったから、身長とか、体重でだいたいのサイズを予想してもらって、それより少し大きめにして、また、サイズ直しに来るように勧められ、わからないからそのようにした。

結婚を申し込んで、断られる不安も心配もなかったけど、結構緊張するものと、指輪を大切にポケットに入れて帰った。

どんなシチュエーションでプロポーズするか、どんなのが彼女は喜ぶのか、僕はそれだけを考えながら帰った。

僕の考えたストーリーはこうだ。

海が大好きな彼女を、砂浜に連れて行き、二人で海を眺めながら、あらかじめ指輪を仕込んだ貝殻を、彼女に渡す。

彼女は「綺麗な貝殻ねって」貝の蓋を開けた瞬間、指輪が入っている。

そして僕は「僕のお嫁さんになって下さい。僕と結婚して下さい」って、彼女は涙を浮かべながら、「はい」って。

どこに住みたいか、どんな家に住みたいか、家具はどんなのがいいか、二人で色々話してこれからの生活を、楽しもうって。

ついに、その時が来た。

本当は、車で行きたかったけど、彼女が電車の中で、お弁当を食べてみたいって言ってたことを思い出し、京都駅から三重に行く、近鉄特急に乗ることにした。

神戸の海を想像していたけど、神戸までの電車の中で駅弁は食べづらい。

近鉄特急なら結構そんな雰囲気だし、急遽、三重にした。

お伊勢さんにも行って見たかったし、帰りに松阪牛も食べてみたかった。

帰りの京都駅で、おじいちゃんの好きな、生八ツ橋も買って帰りたいとスケジュールは満載だった。

その日の天気は、清々しく澄んだ綺麗な空で、天も僕たちのことを、祝福してくれていると感じた。

砂浜について、海を眺めながら、僕はこっそり指輪を仕込んだ貝殻を彼女に渡した。

「まあ。綺麗ね」

そう言っつて、彼女は貝殻を眺め、砂浜に置いてこう言った。

「貝殻さん、綺麗ね。きつと、昔は大切に真珠も育ててきたのかもしれないわね。私は、あなたを持って帰りたいけれど、あなたはここにいるべきよ」

まさかの展開。僕の心は予想外の展開に動揺を隠しきれないでいた。

『こんなとき、福山雅治ならどうするんだろう。こんな時、木村拓也ならどうするんだろう・・』心の中でそんなことを考えていた。

僕は福山雅治に憑依されたようになりきった。

「君は、いつも、人や動物、物にも本当に優しい心を持っている素敵な人だね。貝殻が、君にお礼が言いたいつて。もう一度、私を手を取って触ってみて言っつてよ」

そんなことを言いながら、僕は僕で、福山雅治や、キムタクにはなれない。

「玲奈、その貝殻の中を見てみて」

玲奈は変な顔をしていたが、貝殻を手に取り中の指輪を見た。

「えっ!」

「玲奈。僕のお嫁さんになって下さい。僕と結婚して下さい」

予想以上に彼女は驚き、予想以上にポロポロ泣き始めた。

そのうち、

顔をふせ「ごめんなさい。ごめんなさい」と言い続けている。

「ちょ、ちょっと待って。どうしたの玲奈?ごめんなさいだけじゃわからないよ。結婚したくないならそれでもいいから、顔をあげてちゃんと話して」

彼女は僕と少し距離を取って、砂浜に手をつけて話し始めた。

「良和。ごめんなさい。私、結婚できないの」

「そっか、いいよ。結婚だけが二人の形じゃないから」

「違うの。違うのよ」

「えっ?何がだい」

「言えば、あなたを傷つける。でも、言わなきゃ。初めにちゃんと言うべきだった。ごめんなさい。私には夫がいます」

「.....」

僕は驚きと衝撃で、体も心も固まってしまい、言葉も出なかった。

「最初の食事だけしたら、もう会わないでいようと思っていたの。そもそも、お礼の食事だったし。でも、私は、あなたといると心地よくて、安心できて、楽しくて、元気になって、どんなに辛いことがあっても、生きていける。生きてよかった。そう思えたの。まるで、時が止まったかのように感じたし、本当に時が止まって欲しいと願った。夫とはあまり上手くいってなくて、離婚しようと思っても思ってたわ。でも、今のまま離婚を進めたら、きつと、あなたにも迷惑がかかる。それに、子供もまだ小さいし、どうしたらいいのかわからなかった。もう、会わない。何度もそう思ったの。でも、会わずにはいられなかった。もしかして、私は、現実逃避がしたくて、あなたに逃げていたのかもしれない。そうも考えたわ。でも、良和のことが大好きで、だから会いたくて、もつと早く出会いたかった。何度も、何度もそう思ったわ。何を言っても私は、あなたを騙したことになる。恨んでくれてもいい。憎んでくれてもいい。でも、私がどれだけあなたのことを愛しているか、それだけは信じて欲しい」

あまりにも衝撃が強すぎて、僕は呆然としていた。後から思うと、この時、優しい言葉のひとつでも、どうしてかけてあげられなかったのか、それだけが悔やまれてならない。

僕と彼女は別々に京都へ帰り、二度と連絡をすることはなかった。

それから3年の歳月が過ぎた頃、僕は半鬱状態からやつと立ち直りかけ、あの時の事を冷静に受け止められるようにもなり、彼女が時折、遠くを見つめるその視線は、癖なんかじゃなく、僕が隣で浮かれていた時も、きつと、ずつと苦しんでいた事に今更、気がついた。

あの時、僕がもつと大人で、彼女の気持ちを感じ取ることができたなら、もつと違う結果になっていたかもしれない。言葉にできない心の声を、僕が感じられていたなら、玲奈もそこまで苦しまなくてもよかったのかもしれない。

こんなことの、堂々巡りで、僕は自分を失い、そして心の病はまだ完全には治っていない。

母さん、僕、今なら母さんの気持ちが変わるかもしれない。父さんを亡くして、どれだけ母さんが辛かったか。

辛いとか、悲しいとか、そんな言葉が軽々しく感じるほど、人の感情って、言葉では表現できないことがあるってこと、僕は知ったよ。

この心の苦しみから解放されるのなら、いつそのこと死んでしまった方が楽なんじゃないか。

そんなこと、考えちゃいけないってわかっていても、思っちゃうよね。

男が、たかが恋愛で、大袈裟だと思う自分もいるんだ。

でも、男だって、人間で、心や感情があるから、辛いものは辛いんだよね。

母さん、こうやって人って大人になっていくのかな。

僕、こんな辛い経験するんなら、大人になんかなりたくないよ。

父さん、教えてよ。なんで死んじゃったんだよ。

第4章 病は気から

会社をしばらく休んでいた僕は、復帰しても居場所もなく、やる気も起きなかった。

僕は何がしたいのか、情熱はどこに行ってしまったのか。

これからの生き方を見つけるために、旅に出ようと思った。

会社も退職し、母さんと、おじいちゃんのことには気になったけど、何かあれば、すぐに帰ってこればいいと、楽な気持ちで先の事を考えるようになっていた。

おじいちゃんは、僕のすることをいつでも応援してくれる。

旅に出ることも素晴らしいことだと言ってくれた。

母さんは行く前に、健康診断に行けとうるさかった。

なんでも、最近、僕の顔色があまり良くないことを気にしていたみたいで、安心を買いに行くような気持ちで行けばいいと言ってくれた。

しばらく気持ちが病んでいたし、母さんも何かあったんだろうくらいで、何も聞きはしなかったが、母さんを安心さすために僕は半日ドックに行くことにした。

一週間と少し経った頃、ドックの結果が郵送されてきた。

その結果を見る前に、僕は沖縄へ行き、九州、四国、北海道まで日本を歩き、北海道に着いてからは、インドやギリシャに行ってみたかった。

那覇空港から長崎空港へ向かう途中、母さんから電話が鳴った。

「よっちゃん、今、どこ？」

「今、長崎へ行こうと思って、那覇の空港にいるよ。どうしたの？何かあった？」

「今すぐ、家に帰って来て」

母さんは、理由は帰ってから話すと言って、電話を切った。長崎行きチケットを、関西国際空港へ変更し、はるかに乗って昼過ぎには京都へ着いた。

そんなに、急いで帰らなくても・・・と思い、京都駅から四条河原町まで足を延ばし、母さんの好きなロンドン焼きを買って帰る事にした。

ロンドン焼きは白あんの入ったカステラ饅頭で、甘さと大きさがちょうどよく、食感も好きなんだとか。ロンドン焼きを焼くマシーンは、子供の頃は大きく見えたが、久しぶりに見ると、そうでもないなあって。

僕が、それだけ大きくなったんだけど、これはいつ見ても飽きないマシンだ。なんとなく、疲れたのか、駅まで歩くのが億劫になり、僕は家までタクシーで帰る事にした。

「ただいま」

「よっちゃん、おかえり。手、洗ってらっしゃい。お昼ご飯まだでしょう?」

「はるかの中で簡単なもの食べたよ」

「そう。久しぶりに帰ってくると思って、よっちゃんの好きな焼きそば作ろうと思ってたんだけど」

「母さん、僕、家を出てまだ一週間ほどだよ」

「そうだったかしらね。もう少し経ってる感覚よね」

「で、なんだった?急に帰ってこいって」

「人間ドックの結果、見ないで行っちゃったでしょう」

「なんだ、そんなこと?」

「そんな事じゃないのよ。よっちゃん、ちゃんと自分で見て」

僕は全く健康で問題ないと思込んでいたから、母さんが帰ってこいって言った訳にし少し嫌な予感がした。

そういえば、じいちゃんが昔「期待は外れる、予感当たる」なんて話してくれたが、不安が心を占領する前に、母さんにロンド

ン焼きを渡し、久しぶりに母さんの笑顔を見て、自分の気持ちを紛らわせていた。

送られてきた結果の紙を、母さんが持ってきた。

カステラ饅頭を頬張りながら持つてくるくらいだから、大丈夫、何も無い。何か、体調が良くない日で、ひっかかっただけだろう。

自分の気持ちを安心する方に持つて行きながら封を開けた。

「要再検査」

文字が入ってきた瞬間、やっぱりひっかかっただけだと思った。

「母さん、僕を呼ぶほどのことでもないよ」

「でもね、何か気になってね。気がついたら電話してたの。ほんと呼び戻すほどでもないんだけどね。よっちゃんの顔が見たかったのかな」

そう言つて、お茶を飲みながらカステラ饅頭を食べてる母さんの姿を見ていると、母さんもいつまでも元気ではない。

こうして元気でいてくれる間に、僕ができることはなんだろう。

そう考えながら、母さんが安心してくれるなら、旅は一旦中断し、僕は検査に行こうと決めた。

母さんもじいちゃんも、何でも早い方がいいつて考えの人で、明日にでも行つてこいと言つた。

僕は心細いわけではなかったが、じいちゃんも一緒に行こうと誘つた。

「この歳になると、ひとつやふたつ悪いところが見つかるもんよ。体も消耗品じゃからの。わしは家で、旨いもんでも作つて待つとるよ」

体が消耗品、確かに。じいちゃんの心臓も、休みなく九十年近く動き続けているわけで、心臓だけでなく、細胞全てが絶え間なく動き続けている。

そう考えると、どこか故障する時だつてあるし、ちゃんとメンテナンスをしなければ、劣化が早くなる。

「じいちゃん、体つてすごいよね。家の中にあるもので、じいちゃんと同じだけ動き続けているものつてあるかなあ？電化製品だつて十年も使えば壊れてしまうし、家だつて何処かしら修理が必要になつてくるよね」

「本当に。体つてすごい。あちこち痛くはなつてくるが、動いとる。無理はきかんが正常に働いとるよ。やれ、おしつこが近いの、

目が遠いと言つとるが、感謝でしかない。良和も、もつと年を重ねると、身に沁みってくる」

「そうなんだろうね。じゃあ、明日にでもメンテナンスと安心を買いに行つてくるよ」

そうは言つて、病院に向かいながら、レントゲンや心電図なんかは、何とも思わないが、カメラを飲んで涙が出るほどええざいたり、造影剤を入れられた時は身体中が熱くなって、体がどうなるんだろうと思つたり、検査もしんどいとか痛いとかつて印象しか残つてないから、どんな検査をするのかわからないが、嫌だなあと思いながら、足は病院へと進んでいた。

大学病院は、なんせ待ち時間が長い。

わかつていてもため息をつくのが嫌で、時間を短く感じられるように、本を二冊持参して行つた。

そんな備えをしていくと、案外早くに順番が回つてきた。

検査内容は、血液検査、腹部超音波、断層撮影、磁気共鳴画像。

嫌な検査がなくてホツとした。

検査が終わつて、本の世界に入っていると「竜野さん」と呼ばれた。

部屋に入ると、先生が僕のであろう画像と睨めっこしていた。

先生は小さな声で「肝細胞がんです」そう言つた。一瞬、僕は固まり、頭の中は瞬時に、事実であるかどうか、現実なのか、夢なのか、現実を冷静に分析している。

家族に影で告知するのは昔のこと、今では、患者に直接告知する時代だ。など、頭の中はクルクル色んな事を考えている。

「で、先生、どんな感じですか？」

先生の説明はポイントしか入つてこず、今の現実を客観視している僕がいるのに気づいた。

説明を聞きながら、悲しむとか、慌てるとか、信じたくない。そういう感情は湧いてこない。

ただ、これが現実なら、抗いでも仕方がない。抗いで、癌がなくなるなら、振り乱して泣き叫ぶだろう。

ただ、この現実を、母さんにどうやって説明するのか。

安心させたかった僕の気持ちとは真逆に、母さんに大きな不安と心配を与える事になってしまう。

一層、黙つて旅に出るふりをして、治療できないものか。

そんな事で頭はいっぱいだった。

家に着くまでの時間、母さんにどう説明するか、僕はそればかり考えていた。

僕は家に着いて、母さんが居ないのに胸を撫でおろし、じいちゃんにどうするべきか聞く事にした。

じいちゃんの肩が、一瞬ビクツとなったが、少しの沈黙のあと、

「良和の気持ちは痛いほどわかる。しかし、母さんに黙っておくことは出来んぞ。色んな意味でな。それに、黙っていたことがわかった時、その方が残酷かもしれん。これは、みゆきさんの受け取り方次第じゃが。あの人の性格を考えると、なんで話してくれなかったのかと、悲しむじゃろう。たった一人の息子に信頼されてなかった、頼られてなかった、愛する我が子に何もしてやれなかった。その方が辛いかもしれんの」

じいちゃんの話聞いて、僕は母さんに話す決心ができた。

そんなに母さんは弱い人じゃない。

きつと大丈夫だ。

夕食が終わって、母さんが食器を洗っている時、僕は手伝いをしながらこう言った。

「母さん、今日、病院に行つて来たよ」

一瞬、母さんの手が止まったが、その時僕は、母さんは大丈夫だと確信した。

「そう、で、どうだった？」

「うん。肝臓が少し悪いみたい。入院する事になると思う。でも、治療したら良くなるって、先生言つてたよ」

母さんは片付けが終わると、お茶を入れて、僕をテーブルに座るように言った。

「よっちゃん。ちゃんと説明して。母さん、何を聞いても驚かないから。少し悪いみたい。良くなる。そんな言葉だけでは、母さんわからないよ」

「ごめん・母さん。僕ね、肝臓がんだった。でも、まだ、治療できるって。肝臓内に3センチ以内のガンが複数あって、先生はラジオ波焼灼療法つてのを試みると説明してくれた。正直、よくわからないけど、先生を信じるしかないよね」

「よっちゃん、病院に行つて母さんも話、聞いてくるね。正直、母さん辛い。なんでよっちゃんがつて、思う。代われるものなら代

わってあげたい。でも、起きたことは仕方がない。頑張って治療しよう。きつと良くなる」

「母さん、強くなったね」

「当たり前じゃない。私を誰だと思ってるの？よっちゃんのお母さんよ」

「うん。そうだね」

「前はね、そうでもなかったかもしれない。でも、これも父さんのお陰かもしれない」

「父さんの？」

「そう。父さんのお陰。父さんは言ってた。俺が守るって。この幸せを俺が守るって。で、なんで、先に死んじゃったんだろうと思っただ。本当に優しくして、本当に守ってくれていた。なのに何で？」

寂しくて、悔しくて、これから先、どうやって生きていけばいいのかわからなくなっただ。何も考えられなくて、ほんとに母さん、抜け殻だった。でも、父さんね、何回も夢に出てきたの。いつも笑って、夢の中でも笑ってた。そのうちね、何か私に伝えたいことがあるんじゃないかと思ってるね、夢を見る度、母さんは、父さんの声を聞こうとした。でね、母さんわかったの。父さんが言いたいこと」

「母さん、何がわかったの？」

「父さんが、母さんに伝えたいこと。『大丈夫。みゆきなら大丈夫だから。自分を信じて。父さん、側にいないけど居るから。空からいつも見守ってるから。大丈夫』そう言ってる気がしたの。じゃあ、あなたは空から見守っててちょうだい。これから私がこの子を守るから、見守っててね。そして、母さんは、父さんが生きていた頃より、強くなる事ができた。人は自分のために出来る力なんてそんなになんないんだって、守る者があつてはじめて、強くなれるんだって。だから、自分も大切にできる。そのことに母さん気付かされたの。だから、父さんのお陰。どんなことが起きても、母さんは大丈夫。今回のことだって、最悪の場合と、最高の場合と両方の心構えはできていた。何も言ってくれない方が、母さん悲しい」

「やっぱ、じいちゃんの言った通りだ。母さんすげいや。じいちゃんすげいや。父さんすげいや」
そう言って、僕は泣いていた。

手術の日も決まり、僕は入院した。手術までに色んな検査があり、それ以外は病室でテレビと本が友達になった。

消灯が早いので、イヤホンでテレビを見ていたが、点けているだけで、今までのことや、これからのことを考えていた。

ただ、起きる出来事を通して僕は生きている。

出来事に色んな感情が湧いて、こうなったら幸せ、こうなったらいいな、と思いつながら、その全部は叶わない。

だったら、何の望みや希望も持たずに、ただ生きてるだけかもしれない。

なら、何のために生きているのか。

仕事に行つて、ご飯を食べて、寝て、仕事に行つて、ご飯を食べて、寝て、それを何十年繰り返す。

なぜなんだろう。なのに、病気が治つて欲しいと思う。

何のために・・・

そんな事を考えては眠りに落ちていた。

数日後、無事手術は成功し、家に帰るため、病院の中を歩くようになった。

少し歩いていかなかったから、足の筋力が随分落ちている。

早く家に帰りたいかったが、あと数日は病院にいないといけないらしい。

元気になったら、僕は旅の続きがしたかった。

先生は自宅療養して、もう少し元気になったらと言ったが、僕はインドだけは行きたかった。

インドのヨーガのあるグルに会いに行きたかった。

どこの宗教にも俗せず、あらゆるこの世の疑問に答えをくれるらしい。

僕は、その人と会うことで、何かの答えが見つけれそうな気がしていた。

漸く退院の日が決まり、病院に母さんとじいちゃんが迎えにきてくれた。

久しぶりに外の空気はとても澄んでいて気持ち良かった。

自宅に帰つて、僕はハツとした。

父さんが、退院してきて、しばらく玄関で深呼吸していた時の感覚を感じた。

あの時、父さんは懐かしい家の香りを感じながら、何を考えていたんだろう。

僕も少し深呼吸してみた。

ホッとす。ただ、ホツとした。

唯一、僕が何の鎧を纏わなくても安心できる場所。

そう実感した。

その日は、早くベットに入った。

長い入院生活で、疲れていたし、体力も回復していない。

そう、僕はやっぱり、普段の生活に慣れていくように、療養が大切なんだ。すごく眠くて、布団に吸い込まれていった。

数日が経って、母さんとじいちゃん、が話しているのをたまたま聞いてしまった。

「これからですね」

「ふむ。これからじゃ。みゆきさん、大丈夫かね？」

「ええ、大丈夫です」

何のことはわからないが、僕の事を話していることだけはわかった。

「母さん、僕の知らない、僕の体のこと、何かあるなら教えてくれない？」

「何にもないわよ。よっちゃんに隠してることなんて、何もありませんよ」

「ほんとに？」

「疑り深いわね。ほんとよ」

「じゃあ、何で、この間、これからが大変とか言っていたの？」

「あら、聞いてたの。よっちゃんも知ってることよ」

「僕も知ってること？」

「そう、手術が無事に終わったことは本当に良かったこと。でも、再発ってことはないとも言えない。これから先、一年、また一年、5年経って初めてお祝い出来るかな？そして、十年よ。それまで、食生活に気をつけ、免疫力、抵抗力を強化しないとね。年齢が若ければ進行も早い。よっちゃんも知ってることよ」

「そうか。うん。知ってたよ」

「だから、これからが、これからも闘いなよ」

「うん。母さん、ごめんね」

「なに言ってるの。今、生きてるから大丈夫よ。よっちゃん、インドに行きたいんでしょ？」

「うん。行きたいよ」

「じゃあ、頑張らなくちゃね」

そんな話をして、毎年、検査に行き、五年が過ぎようとしていた。

僕は、結構自由の利く会社に就職し、毎日が平穩に過ぎて行った。

何の変化もなく、そして、何の刺激もなく、刺激を求める気持ちもなく、ただ、毎日が平凡に過ぎて行った。

母さんとの約束で、五年経ったらインドに行つていいし、何処にでも好きな場所の、好きな景色を見てきていいと言ってくれた。

インドの写真やマップを見ながら、ワクワクしていた。

「じいちゃん、僕、インドに行つてこようと思う」

「おお。そうか。良和、また、足止めを喰らうかもしれないぞ」

「なんで？」

「ただの勘じゃ。すんなりいく時は、それでええが、すんなりいかん事は、そうじゃないか、その時期ではないということ。一度、足止めを喰らつた事はもう一度よく考えろつて意味でもある。それでも行きたい気持ちがある場合は、時期ではない」

僕はじいちゃんの言葉に疑問を感じた。

「すんなり行くつていい事なの？それが自分にとって辛い出来事だったとしても？」

そうじいちゃんに聞いた時、僕は玲奈の事を思い出していた。

僕たちは、出会いから結構すんなり順調に、距離が縮まった。

お互いに惹かれ合い、とても幸せだった。

だが、結末は、鬱になる程、精神はボロボロで、こんな想いをするくらいなら、出会わなかった方が良かったと思うこともあった。

「そう。結果がどうであれ、その経験は自分にとって必要だったから経験した。そこで人は苦しみや、悲しみを感じて強くもなり、優しくもなれる。それが人生だとじいちゃんは思っておる」

僕はじいちゃんの言葉に、反発心を感じながらも、そうかもしれないと、自分のこと、母さんを見てもそう思った。

じいちゃんは、こうも言った。

その思いが本物ならば、いつかは必ずそうなる。

時は、人がどうすることもできないと。

それから数日が過ぎ、会社に着いて一時間もしないうちに、母さんからLINEがあった。

『おじいちゃんが、救急車で運ばれた。早退できそうなら府立医大まで来て』

『おじいちゃん!』

僕は心の中で何回も呼んだ。

『直ぐに行くから、待ってて』

焦りと動揺で、タクシーがどの道を走っているのか覚えていない。

おじいちゃんが家に来てから、これまでのことが、早送りのように頭の中を駆け巡った。

「すみません、竜野です。今、救急で運ばれてきた、竜野 龍二はどちらですか？」

「ご家族の方ですか？」

「はい」

「ご関係は？」

「孫です」

こんな時にも、マニュアルかよ!と思いつながら、このやり取りが結構、僕を冷静にさせてくれた。

「こちらです。ご案内します」

エレベータを降りて、廊下の向こうの椅子に母さんが腰掛けていた。

「母さん。じいちゃんは!」

「よっちゃん。おじいちゃんね、よっちゃんが出かけて、しばらくしてから、急に倒れたのよ。おじいちゃんも年だからね、いつ何があってもおかしくないとは思っていたけど、年のわりに元気だし、まさか、倒れるなんて・・・」

「で、どうなの?」

「まだ、わからないのよ」

「そっか」

暫くして、処置室から先生とその後ろに、じいちゃんがストレッチャーに乗せられたまま出てきて、少し調べると言って、検査室へと運ばれて行った。

じいちゃんの目は薄っすら開いていて、母さんと、僕の顔を見ていた。

「母さん、僕、一度、家に帰って、じいちゃんの着替えとつてこようか?」

「そうね、直ぐに帰れないかもしれないしね・・・でも、もう少し待ちましよう。そうしたら、本当にそうなっちゃうと嫌でしょ。はっきりしてから。今日、帰れるかもしれないし」

「そうだね。母さん」

「よっちゃんも、頼もしくなってきたわね」

「母さん、僕、もうアラサーだよ」

「そうね。いつまでも子供だと思っていたわ」

この頃には、僕も母さんも落ち着きを取り戻し、外に昼食を食べに行った。

母さんは蕎麦を食べながらこんなことを言った。

人が生まれた時から死に向かっている事は誰でも知っている。

それが、早いか遅いかだけの違いなのわかっている。

でも、父さんみたいに早くに天国に行くことは、辛く悲しく感じてしまうのに、おじいちゃんみたいに平均寿命を迎える頃になると、辛さや、悲しさが少なくて感じる。

おじいちゃんに万が一のことがあっても、心は準備している部分もある。

みんな、そんな感情を感じていても、冷たいとか、延命することが正義で正しいって無意識に思っているから、本人が健康で長生きできないなら自然のままがいいと願っていても、世間体やら、家族のエゴだけで、ペースメーカーを入れたり、口から食事ができなくなれば、直接、胃に栄養を送ったり、そんなこととしてまで生かしておくのは、母さんは残酷に感じる。

本人が、そこまでして生きたいと願っているならいいけどね。

おじいちゃんは、何かあったら自分の意志を書いておくからって言っていて、家に帰ったら、おじいちゃんの部屋にそれがあるだろうから探してみよう。

こんな母さんの話を聞いて、確かに、じいちゃんが救急車で運ばれたと聞いた時は、びっくりしたけど、もう年だしって思っている自分がいたように思う。

これって冷たいとかじゃなく、人として当たり前前感情なのかもしれない。

生まれて来る時は『おめでとう』って祝福されるのに、死ぬ時は違うのかなって考えてしまう。

声を大きくして言えないかもしれないが、人生を精一杯生きてきて、寿命を全うしたら、それも『おめでとう』って僕は思ってしまう。

人によって考え方の違いがあるのかもしれないが、この世の真実もあるのかもしれない。

どちらにせよ、あまりにもデリケートなことすぎて、語ることを避ける風潮があるのも確かだと僕は思う。

家族だけでなく、生きていたら、出会いと別れの繰り返しなわけで、親しい人、大好きな人との別れは、とてつもなく悲しい。

別れて何で悲しい感情になるのか、悲しくない別れもあるけど。

人間の感情や心理って、ほんとに不思議でよくわからない。

そうこうしている間に、時間はとつと過ぎてしまい、僕と母さんは病院に戻った。

じいちゃんは、結局、入院になった。

入院になっただけでなく、先生はそんなに長くないと言った。

じいちゃんの肝臓に癌が見つかり、リンパや肺にも転移していると聞かされた。

さすがに、母さんも僕もショックを隠しきれず、その日、家に帰ってから、母さんとあまり話をしなかった。

とりあえず、じいちゃんの部屋から、じいちゃんの意志を見れるような物を探すが、その時も、二人とも無言で、黙々と探していた。

僕がじいちゃんの、タンスの中を探している時、母さんの鼻を吸う音が聞こえた。

「母さん、どうした？あつたの？」

「うん。あつたよ。よっちゃん。じいちゃんね、やっぱり、わかってたみたい。体調悪かったのよ」

「なんて書いてあるの？」

「うん。これ、おじいちゃんね、日記つけてたみたい」

「そういえば、さつき、押入れに、それと同じノートが何冊もあつたよ。表紙に日付が記してあつた。ずつつけてたのかもしれない」

「よっちゃん。書いてあるわ。ここよ。もし、わしに何かあつた時は、延命治療は要らないって書いてあるわ。最後の我が儘を許して、叶えてくれって」

母さんは言った。

もうすぐお迎えが来る人だとわかっていても何かしたくなる。

最善の治療を出来ないかと考えてしまう。

治るものなら治してあげたいと思ってしまう。

元気になって、あと十年生きられるなら、そうしてあげたいと思う。

蕎麦屋で母さんが話していた事とは、違うことを言っていると思は思ったが、いざ、自分が直面するとそうなるんだと思つた。

そして、僕も同じ想いだつた。

僕が寝てから、母さんはじいちゃんの部屋にずっといて、何やらゴソゴソしていた。

母さんがあまり眠っていないだろうと思い、僕は、簡単な朝食を作り、母さんを起こした。

朝食を済ませると、じいちゃんの荷物を持って病院に向かった。

病院に着くと、母さんはじいちゃんに明るく「おはよう」と言った。

さつきまで、どこを見るかわからない視線で、遠くを見つめていた人とは思えなかつた。

じいちゃんは、母さんの声で目を開けた。

「みゆきさん、すまんね」

「嫌ですね。おはようと言つた返事が、すまんですか？おはようと言われたら、おはようって言うんですよ、お父さん！」

「ホッホッホッ。そりやすまん。おはよう」

「お父さん、今度、すまんと言ったら、千円罰金です」

「こりゃ、高いね。また、言いそうじゃから、百円にしてくれんかの?」

「ダメです!」

病室は一気に笑いが充満した。

「おお、良和もすまんの」

「じいちゃん、はい、千円罰金だよ」

「おおー。しまった!」

そう言って、じいちゃんはおでこに手を当てた。

「良和、仕事は行かんでいいのか?」

「うん。今日は、昼からの出勤にしてもらったんだ」

「じゃあ、わしが罰金払うから、それで会社に菓子折り持って行け」

言葉にはしなかったけど、病人がそんなに気を遣わなくてもいいよって、多分、母さんも思っていたと思う。

僕が会社に行っている間、じいちゃんのことはもちろんだけど、母さんの方もつと心配だった。

じいちゃんの前であんなに明るく振る舞って、無理してるんじゃないかって、僕は父さんに『守って』と心の中で祈っていた。会社から帰ったら母さんは家にいた。

「よっちゃん、おかえり。今日は、帰りにお寿司買ってきたから、赤出汁も出来るから、手洗ってらっしゃい」

母さんの好きな、ネギトロ巻きと僕の好きなお稲荷さんと鯖寿司だった。

昔は、母さんも握り寿司が好きだったけど、僕が社会人になった頃から、細巻きや、押し寿司が好きになったらしい。人の好みも変わるものだ。

結構元氣そうで、心配するほどでもなかったかもしれない。

「母さん、僕の前では、無理に明るくしないでも大丈夫だからね」

「ありがとう。大丈夫よ。おじいちゃんの前ではね、つつい・・」

「うん、何となく、わかるよ」

「先生がね、あと三ヶ月くらいって、言ってたわ」

「そんなに・・」

「ねえ。お父さんの意志も先生に話したのよ。先生も治療と言っても抗がん剤治療くらいで、手術も無理だって。年齢からしたら、緩和ケアが適切だって」

「そうなんだね。何だか、じいちゃんの思った通りって感じがするね」

「そうよ、母さんも思ったわ。お父さんの日記読んでても、具合が悪かったの知ってて、病院に行かなかったのよ。もっと早くに診てもらってたら、治療できたかもしれないし、完治できたかもしれないでしょ。わかっててそうしたとしか思えないのよ。お父さんらしいと言えばそれまでだけどね。それに、毎日、病院に来なくていいって。私が来ると思ったらゆっくり寝ていられないですって」

「じいちゃんらしい。ほんと氣い遣いだよね」

「昔の人ってそんなものかもね」

「じいちゃんに何かしてあげれることないかなあ」

「そうね。食べる量も随分減ってるし、好きなものを少しでいいから食べさせてあげたいわね」

「わかった。じゃあ、休みの日に僕が持つて行くよ」

「そうね。よっちゃんが休みの日は一緒に行きましょう」

休みの日は、母さんと、じいちゃんの好きな食べ物を持って病院に行った。

じいちゃんは喜んでくれたが、眠ることが多くなった。

先生は薬のせいもあると言っていたが、じいちゃんに会う度に、別れの日が刻々と迫っていることを、僕も母さんも感じざる得なくなっていた。

僕は、何も出来ないけど、じいちゃんの側に居たかった。有給休暇を少しもらって、僕は毎日じいちゃんに会いに行つた。時に、病室で寝ることもあった。

意識が朦朧としている時もあれば、時間は短い、はつきりと会話できる時もあった。声の力は小さくなつてきているけれど、じいちゃんは何だか幸せそうに見えた。

ある時、じいちゃんは僕とたくさん話をしてくれた。

「良和、不思議な話を信じるかの？」

「不思議な話？内容にもよるかもだけど、聞いてみないとわからないかな」

「そうじゃな。人間は、何故、長生きすることが良いと言われてるか。これは輪廻転生ありきで話すが、人は八十四歳まで生きると、二度と生まれ変わりは無いという説がある。これまで生きることが出来た者は、これまで、これまでとは過去生も含めて、全ての罪が赦され昇華されると言われとる。どんな極悪非道な人間でもじゃ。逆に、それまでに寿命を迎えた者は、再び転生し、また違う人生を歩む。理由を知らずとも、潜在的には、魂では、と言つたらいいかの、そのことを人間は知っている。だから長生きが良いことだと言う。よつて、じいちゃんは、もう、人間をしなくていいんじゃない」

「じいちゃん、難しい言葉がたくさん出てきたけど、その類の本は僕もたくさん読んだから、なんとなくわかるよ」

「そうか。さすが、わしの孫じゃ」

「でも、わからないよね。生まれてきて、おめでとうなのに、じいちゃんの話では、長生きして人間に生まれてこないことが、良いことみたいだね」

「いいところに気がついたの。人間になる、ならん、その事におめでとうではなく、全ての罪が赦されることが、おめでとうつて意味だと、じいちゃんは解釈しとる。人間には自由意志があるから、極楽浄土に行つて、また、人間をやりたかつたら、神さんに申し出るんじゃない。したら、また、人間になれるらしいぞ」

「僕も沢山の本を読んだけど、まだ答えが見つかってないんだ。産まれてきたのは、魂を成長させるためとか、地球に遊びに来たとか、幸せになるためとか、色々書いてあるんだけど、どれが正解なんだろうって思うんだ」

「ほう。最近はそんな本がたくさんあるんじゃないか。それが正解かは
じいちゃんもわからんわ。だが、どれも正解じゃないのわ。じ
いちゃんが思うに、人間はどんな出来事にも意味づけをしたくなる
生き物らしい。お釈迦さんが悟りを得た時『空』と言った。無では
なく『空』じゃ。わしはお釈迦さんのように悟りは得ておらんか
ら、その意味もはつきりとはわからん。じゃが、事実はまだそこに
あるだけ。そこにあるだけの物や事柄を人は勝手に、意味づけし
るだけじゃないかのお」

「意味づけしてるだけ？」

「そう、たとえば、雨が降っている。ただ降っているだけじゃ。そ
れを、人は、雨が降ると、足元が悪くなる、仕事に影響がでるなど、
理由は様々じゃが、良いように感じん者もおる。じゃが、お百姓さ
んは、雨が降ると喜ぶ。事実、わしらは雨が降らん事には困った事
になる。作物が育たん。野菜の値段も上がる。値段が上がるだけな
らまだしも、作物が出来んとなると何を食べるのかの」

「うん、雨乞い師なんていたんだよね」

「そうじゃ。生きてる事にも意味はないのかもしれない、わしも
思った時期があった。人は幸せを求めているのに、苦しみや悲しみ
や争いが絶えん。じいちゃんの時代は、生きるのに必死な時代
じゃった。今は、科学や技術が進歩し、蛇口をひねれば水が出る。
左に回せばお湯も出る。『お風呂が沸きました』なんて声もでる。
洗濯は洗濯機がする。掃除機がクルクル回る時代になった。昔は、
魚を人間が運んでいた。今みたいに鉄道も、トラックもない時代に
じゃ。鯖街道にはいろんなルートがあつて、そのひとつに、福井の
小浜から京都の左京区まで、人の足で運んでいた。そのルートはマ
ラソンのコースになつとる。気がつけば、辺りは素晴らしい事だら
けじゃ。わしらは、世の中にある物を買つて、それを使つたり、
作つたりするだけで、もともと人が作つたものなんて何ひとつな
い。地上にある、ありとあらゆるモノを応用してるだけじゃ。明
日、太陽が出んかったらどうする。この瞬間『酸素無くしまあ
す』って神さんが言つたらどうする。そんな当たり前の事に目を向
けて見ると、恵まれていることが山ほどある。わしは思った。幸せ
を追い求めても辿り着くことはない。幸せであることに気づくこと
じゃ。わしはそれを、ばあさんから教わつた。ばあさんが死んでか
ら、やっと気がついた。ばあさんが生きてる頃に、わしが幸せであ
る事に気がついていれば、ばあさんをもっと大切にすることが出来
てたじゃろうな。時を人が左右することが出来んとするなら、それ
を気づく時は、その時じゃったんじゃないか」

「じゃあ、その時その時に起きる出来事もベストタイミングってこ
と？」

「わしは、そう思つとる」

「僕、何だかわかったような気がするよ」

「そうか、何か気づきがあったか」

「うん。僕、インドに行かない。また行きたくなくなるかもしれないけど、こんな近くに僕のグルがいたよ」

「ほう。それは良かった。わしも長生きした甲斐があったの」

そう言つて、じいちゃんは落ちるように眠つた。結構、体力を使ったのかもしれない。僕は、もつと早く、自分の心の中で感じていることや疑問を、じいちゃんに聞いておけば、もつと沢山の話を聞けたかもしれないと思つた。

いや、今のじいちゃんの話では、これがベストだったんだ。

その日は、じいちゃんの横の簡易ベットで眠る事にした。

僕は、やつとこんがらがっていた紐が解けていくような気がした。忘れていた記憶が突然思い出されることもあった。

あれは、僕が小さい頃、母さんだ。母さんが僕に言っていたんだ。

『プリンは牛乳さんとたまごさん。牛乳さんはモーモーさん。たまごさんはコケッココさん。みかんはみかん。みかんは太陽。みかんと仲良しさーが入つて並べ替え』

ヘンテコな節だったけど、いつも母さん唄つてた。

その唄の意味がわかつたよ。母さん・・

何故だかわからないが、僕はポロポロと涙が溢れた。

泣きながら、だんだん笑えてきた。

じいちゃんは次の日、ずっと眠っていた。

昨日あれだけ喋つた事が嘘のように、体もピクリとも動かず、ただゆっくりと息をしながら眠っていた。

母さんに、じいちゃんがたくさんお話しができたことも伝えたくて、朝のうちに病院を出た。

家に帰ると、母さんはじいちゃんの部屋で何やら整理をしている。

「母さん、ただいま」

「よっちゃん、おかえり。おじいちゃんどう？」

「うん。それがね、昨日、入院する前みたいに、沢山、長い時間お話をしてくれたんだよ。その後、爆睡したけどね。で、母さんは何してたの？」

「そう。おじいちゃん。少し元気な時もあるみたいね。おじいちゃんの日記を見てたらね、どうやらおばあちゃんが亡くなった後から、ずっと書いてたみたいなのよ」

「そういえば、おじいちゃん昨日言ってたよ。おばあちゃんから大切なことを教わったって」

「そうみたいね。そんなことやら、おばあちゃんが亡くなってから、日々の出来事もそうだけど、おじいちゃんの感情日記って感じよ」

「そうなの。僕、それ読んでみたい」

「ちよつと待つてね。母さんまだ全部読んでないの。母さん読み終わるまで、よつちゃん待つてて」

「えー。母さんが読み終わるの待つんだ」

「そう。順番。順番。おじいちゃんが、他にも何か意志みたいなもの書き残してないか確かめておこうと思つてね」

「それなら仕方ないね。僕は待つてるよ」

それから三日、病院に行つても、じいちゃんはずっと眠つてた。

じいちゃんの好きな、果物やゼリーを持つて行つても、じいちゃんの口に入ることはなかった。

それでも、いつ目が覚めて、ポンカンや桃が食べたいと言うかもしれないと思ひ、小さく切つて病院に持つて行つた。

母さんと一緒に病院に行つた日、主治医からここ数日だと告げられた。

病院の先生つて、そんなことまでわかるなんてすごいなつて、感心したが、ついにその日が来てしまふんだ。

僕も母さんも覚悟はしていたが、じいちゃんはきつと、誰も病室にいない時を選ぶような気がしていた。

そんな僕らの予感が当たつたかのように、僕の有給が終わり、仕事に復帰した初日、家に帰ろうとした時、母さんから連絡があった。

母さんも自動販売機に、水を買に行った、ほんの短い時間の間の出来事だったらしい。

母さんが病室に戻って、じいちゃんの異変に気づいて先生を呼んだそうだ。

僕が駆けつけた時には、主治医と看護師と母さんがじいちゃんのベッドの側で立っていた。

「おじいさんに声をかけてあげて下さい」主治医が僕に言った。

「じいちゃん、僕だよ。良和だよ。聞こえるかい？僕ね、もつと早く、じいちゃんに話を聞いてもらえれば良かったと思つたよ。でもね、これもベストだったんだよね。それね、僕、わかるようになってたよ。じいちゃん、じいちゃんが入院してから、覚悟はしてたよ。でもね、やっぱり寂しいよ。じいちゃん、聞こえてるかい？ずっとね、美味しいご飯作ってくれてありがとう。料理も教えてくれてありがとう。僕は、沢山、沢山、じいちゃんにしてみらつてばかりで僕はじいちゃんに、何もしてあげれなかった。ごめんよ。何もしてあげれなかった。たくさん、たくさん、本当にありがとう。おじいちゃん、ありがとう・・・」

「午後、一八時十五分、ご臨終です」

そう主治医が告げると、看護師と共に深々と頭を下げ、病室を後にし、じいちゃんと、母さんと、僕と三人だけになった。

「お父さん、頑張ったわね。ねえ、よっちゃん、おじいちゃんほんとはよく頑張ったわよね」

「うん。そうだね」

僕はその時、幻が見えた。

産まれたての赤ちゃんより少し小さい身体の、羽根の生えたエンジェルが、じいちゃんの右肩、左肩、右足、左足の四箇所、一人ずつ、羽根をパタパタさせながら、じいちゃんの身体を持つている。

同じ高さ、同じ速さで、ゆっくり丁寧に、上昇していく。

エンジェルたちは、なんともいえない柔らかな優しい微笑みで、じいちゃんを空へと運んで行った。

窓の外に目をやると、外は薄っすら暗いはずなのに、雲の隙間から、光が差し込み、地上から、天に昇る、光の梯子が見えた。

僕はトンネルの中にいる時みたいに、耳がツーンとして、高い鈴のような『キーン』とした音を聞いた。

暫くして、看護師がエンゼルケアをしてくれ、その後、じいちゃん、僕と母さんと自宅に帰った。

じいちゃんは、最後の夜を家で過ごした。

大好きな、百合の花に囲まれながら、まるで生きているかのように穏やかで、安らかな顔だった。

母さんと、僕は交代で線香を焚いた。

じいちゃんの葬式は、じいちゃんの意味で行わなかった。

じいちゃんが、ばあちゃんに建てた墓で、一緒に眠らせてくれればそれで大満足と日記に書かれていたらしい。

僕と母さん二人だけの生活になった。

第5章 再会

じいちゃんが天国へ行ってから、僕は毎日、じいちゃんの日記を読むのが習慣になった。

寝る前に、少しづつ読んだ。

日によって、2〜3行で終わってる日もあれば、2ページ、3ページ綴られてる日もあり、ばあちゃんが亡くなってから、書かれた膨大な量の日記は、大学ノート三十冊近くに及んだ。

内容は、僕の知的好奇心を唆り、じいちゃんが書いたということもあり、ダイレクトに感情に響くことも多かった。

じいちゃんが自分の感情と向き合ってきた、日々の中の大きな気づきから、小さな気づきまで、人は六十年、七十年経っても、向上したい、成長したいと願う生き物なんだとつくづく感じた。

心の中で起きてる出来事は、まるで小宇宙のようで、わからないことも多かったが、表面では計り知れない、感情の渦、思考の癖、そんな法則性のようなものも感じた。

日記を読み終わる頃、ひとつの季節が過ぎようとしていた。

ある時、僕がちょうど入院している時期の日記が抜けていることに気がついた。

母さんに尋ねても、母さんは知らないと言うだけで、じいちゃんの部屋を探しても、それは見つからなかった。

数日して、母さんは友達と城崎温泉に旅行に出かけた。「どうせ行くなら、蟹が美味しい季節に行けばいいのに」と、僕は言ったが「あまり寒いとマリンスワールドに行くのが辛い」と、寒がりな母さんの言いそうなセリフだった。

蟹が食べられなくても、沢山、新鮮な海の幸を満喫できると嬉しそうに出かけて行った。

城崎辺りだと、そんなに遠くもないし、京都駅まで行かなくても二条駅からでも乗車できるから大変便利で、旅の疲れもそれほどないだろうと、そう決めたらしい。

母さんは、昔から、水族館や、マリンスワールド系が大好きで、京都水族館が出来た時は大喜びだった。

僕が子供の頃、家族でサファリーパークに行った時、苦虫を潰したような顔で、恐々、見物していた姿を覚えている。

岡崎の動物園に行ったときも、フラミンゴやレッサーパンダなんかを観察している時は、楽しそうにしていたが、ゴリラやキリンや大きな動物は、体がのけぞって、どうも苦手らしい。

母さんには、福知山の動物園が丁度いいらしい。

今まで、いろんな事があったから、母さんの人生を楽しんでほしいと思ったし、漸く、そう出来る母さんになったんだと、僕はとても嬉しかった。

母さんが旅行から帰ってきた時、心地が良いように、僕は部屋を掃除して、キッチンも綺麗にしておくことにした。

小さい頃からこの家に住んで、母さんや、じいちゃん、父さん、誰かしらがこの家にいた。

今、一人でこうして掃除をしていると、この家で僕がひとりで居ることは、初めてだと思いつながら、そして、僕が知らないところで、母さんや、じいちゃんがいっても、家を綺麗にしてくれてたんだと、そんなこと感じながら、丁寧に掃除をした。

母さんの部屋に入ることなんて、滅多になかったが、洋服ダンスの上には、元気だった頃の父さんの写真や、僕が生まれる前に二人で撮った写真、じいちゃんとかあちゃんの写真が飾られていた。

写真立てを大切に拭きながら、みんな笑顔だったと、懐かしく思いつながら、タンスの上段にふと目をやると、母さんの洋服がはさかっている。

ほんと、あわてんぼうで、雑な所があるから、服を挟んで閉めたんだ。

引き出しを開けて、きちんと直そうとするが、奥に何かが突っかかって、きっちり閉まらない。

もう、母さん、面倒でそのままなんだと、引き出しをひっこ抜いて、奥のつかえを取ろうとした。

タンスの奥から出てきたのは、抜けていたじいちゃんの日記だった。

表紙の日付を見ると、それがひと目でわかった。

僕は、手を止め、じいちゃんの日記を読み始めた。

三月二十日 晴

良和が癌だと聞かされる。

一瞬、頭を鈍器で殴られたかのような衝撃。

なんであの子が、まだ私の半分も生きていない。

代わってやれるものなら代わってやりたい。

もう、私より先に逝くことは、耐えられん。

私が、永らえて生きていても、もう社会の役にも立たん。

みゆきさんにも迷惑になつていく。

神さま。仏さま。

どうか、どうか、私がどんなに苦しい死に方をしても構いません。私の残りの寿命を、良和に譲れるものなら、私の最後のお願いです。どうか、どうか、聞き入れて下さい。

ばあさんのときも、息子のときも、私は神や仏にそう願った。

しかし、あなた方は、私の望みを聞き入れてくれなかった。

今度こそ、今度こそ、どうかお頼み申します。

あの子の人生は、これからです。

私のこの願いを聞き入れて下さるなら、私はどんなことでもいたします。

三月二十一日 曇り

今日から、毎日、神社に参る。

朝の、散歩コースを変え、佛敎大学から東に入り、大徳寺 金龍院跡から北へ上る。

今宮神社で手を合わせ、叶えてくれなければ、神をも打ち倒す。

そんな気合いで手を合わせた。

三月二十二日 雨

雨が降ろうが、槍が降ろうが、私は参る。

願いが聞き届けられるまで。

神さまが首を縦に振ってくれるまで私は来ます。

三月二十三日 晴

神さま、私の命をもつて行って下さい。

あの子の代わりに、私を連れて行って下さい。

私の声が、あなたに届くまで、私は何度でも願います。

私ら人間の力では、どうもならない事も、あなたは容易く出来る事を私は知っている。

もし、叶わぬなら、私が納得のいく答えを私に示して下さい。

じいちゃんの記事を読みながら、僕は声を上げて泣いていた。

こんなことを、こんなことをじいちゃんが考え、想い、毎日、毎日お参りしてくれてたなんて。

言葉で語ることは簡単なことだけど、毎日、何年も、僕には、僕には、決して出来ない。

そんな素振りすら見せないで、じいちゃんがこんなにも僕のことを想い祈ってくれていたなんて。

じいちゃん、なんでそこまで、なんでそんなことしたんだよ。

じいちゃん。じいちゃん・・・

しばらく、母さんの部屋にうずくまり、僕は溢れ出る涙を止められずにいた。

晴れていた空から急な大粒の雨が降り出した。

その音で、僕は空を眺めた。

空は青い。天気雨だ。
少しの間、雨を眺めた。

これまでの、じいちゃんとの日々を思い出していた。
小さい頃の、忘れていた記憶なんかも、ふと、思い出した。
じいちゃんは、いつだつて僕の味方で、いつだつて笑顔で、叱られることはあつても、じいちゃんは怒った事はなかった。

どれだけ、僕は守られて、愛されて、育ててもらえたのか、こんなに大切にされてきたなんて、今まで僕は気づかずにいたなんて、なのに、もう一人前の大人になった気持ちでいたよ。

じいちゃん、ごめんよ。じいちゃんにどれだけ、ありがとうと言つても、言い尽くせないよ。

僕の代わりに、じいちゃんは、僕の病気を背負つてくれてたなんて。

そんなこと、そんなことも知らずに、僕は・

これから、誰に相談すればいいの？

今日のこと、母さんにどう言えばいいの？

どれくらいの間、母さんの部屋で泣いていただろう。
外はすっかり暗くなり、その日、眠る前にじいちゃんの部屋で日記を読み返し、そのまま、じいちゃんの部屋で眠っていた。

その夜、不思議な夢を見た。

じいちゃんが、とても嬉しそうな顔をして、誰かとお飯を食べていた。

おばあちゃんだ！

僕は、夢を見ながらそう思った。

じいちゃんはとても幸せそうで、見ている僕まで幸せな気持ちになった。

じいちゃんとおばあちゃんが、ご飯を食べてる所に、僕がテレポーションしたかのように、参加している。

「良和。よく来たな。さあ、そこに座つて、一緒に食べよう」

そう言つて、じいちゃんは僕にお箸を渡し、おばあちゃんはお茶を入れてくれた。

「じいちゃん、なんだか若返つた？」

「こっちは好きな年齢でいられる。ホホ、本当に天国じゃ。良和、心配はいらん。ばあさんも迎えに来てくれて、良和の父さんも迎えに来てくれた。わしや、幸せじゃ。なあんにも寂しゆうない。食べたい物も沢山ある。味もわかるし、匂いもわかる。それに、会いたい人に瞬時に会える。ホホホ」

「良かったね。じいちゃん。本当に良かったよ」

そのあと、じいちゃんは、家の周りを案内してくれた。何もなくて、辺り一面草原で、大きな木が一本立っていて、心地いい風が吹いていた。

『なんて穏やかな場所なんだ』

僕はそう想いながら、草原の上に寝転んだ。

「ここは、ばあさんと毎日来る。この木の木陰で、二人で座り、色んな話をする。ばあさんは、わしが優しくなつたと大喜びじゃ。この草原は、わしとばあさんの好みじゃ。花を咲かせたいと思えば咲かすこともできる。川を流す事も可能じゃ」

「へえー。なんでも思い通りになるんだね」

「天国じゃ。ホホホ。良和、気をつけろ、転がるのはいいが、たまに草で皮膚がやられるからの。ここいらの植物は元気じゃ。科学物質や薬害なんて何も無い世界じゃから」

「イテテ！」

「ほれ、言わんこつちやない。ホホホ」

久しぶりにじいちゃんの笑顔を見て、僕は嬉しくて、つい、はしゃいでしまった。

気がつくと、僕は自分の笑い声で目が覚めていた。

夢で感じた気持ち、起きてからも続いていた。

とても嬉しくて心地よかった。

歯磨きに洗面所に向かった。

顔を洗うと頬がヒリヒリする。

「あつ痛！」

鏡を見ると、夢の中の草原で、顔に傷が入った場所と同じだった。

傷を触りながら「夢だよね・・・」

そう言いながら、僕の頭の中では理解不能な出来事だった。

不思議なことに、朝、目覚めてから、昨日、じいちゃんの日記を見て感じた、なんともやるせない感情は消えていた。

すると、鏡に何かが映っている。

僕は一瞬、怖かったが、何があるのか鏡の中を覗き込んだ。

『こつちだよ』

僕は心臓が止まるほどびっくりしたが、ゆつくりと後ろを振り向いた。

そこには雲が形になったような白い龍がいた。

「君かい？今、喋ったの」

『そうだよ。良和、久しぶりだね』

「君、僕のこと知ってるの？」

『知ってるも何も。君と私はずっと一緒だったよ』

「どういう事??」

『無理もないから、説明するね。良和と私はずっと一緒について、良和がこの地球に来る前から私たちは一緒だった。君のお母さんを探すのだって一緒に探したんだ』

「.....」

『まだ、思い出せないよね。ちょっと早かったかなあ？でも、大丈夫。そのうちわかるよ』

「そのうちって、今朝の夢といい、今の出来事といい、僕は、頭がおかしくなってしまったのか・・・」

『おかしくなんてなってないよ。むしろ正常さ。今朝の夢は明晰夢だね。明晰夢ってか、本当にお祖父さんと会ってたんだよ』

「えーっ！じいちゃんと、会ってた!」

『そうさ、人間は眠ってる間、あっちの世界に行って、作戦会議をしたり、実際に天国にいる人と会う事もできる。その、証拠は、良和がお祖父さんの日記を見て、居た堪れない感情をどう消化しているかわからず、お祖父さんはこれではいかんと、良和と会って安心させたかったんだ。だから、朝、起きた時、気持ち晴れやかになっていただろう?』

「ううん。そうだね」

『この三次元は物質世界だけど、この宇宙には物質だけでない、エネルギーだけの世界もあるんだ。地球が特別と言えばそれまでだけど、地球は二元性の星だから、目に見えるものと、そうでないものがある。それは誰でも知っている事だよ』

「わかるようで、わからないようで・・・」

『地球にある空気は、目には見えない。ガスだって、電気だって目には見えないけど、エネルギーとしてあるよね?』

「うん、あるある」

『ただ、科学的に実証されていない事柄に関しては、人間はそれを信じる人と信じない人と表現している。幽霊なんかもそうだよ。見える人には存在している、見えない人には存在していない。でも、見えない人でも存在していると知っている人もいる。これをそう信じているって表現するよね。死後の世界もそうさ。有ると信じている人と、無いと信じている人。稀に、一度、あちら側へ行って、帰って来た人は死後の世界があると言う。信じてるじゃないって、あるって。僕たちからすれば、反対なんだけどね』

「反対ってどういう意味?」

『僕たちからしたら、こちらの世界に戻ってきた。地球へは行ってくる。こちらに戻るってこと』

「ふーん。じゃあ、おじいちゃんは死んだんじゃないかって、そちらの世界に戻ったの?」

『そうそう、地球での旅が終わって、こちら側に帰ってきたんだ。体に魂が宿るとかって言うよね?魂が入らなかつたら、体はただの物質だよ。動くことも出来ないよ。お祖父さんは、良和のことが心配で、元気にやつてるからって安心させたかったんだ』

「そんなこと、わかるんだ」

『わかるよ。見えないけど、守護霊や天使なんかもわかっているよ』

「なんでわかるんだろう?」

『人間だって、本当はそんな力を元々は持っているんだ。ただ、発揮されていない人がほとんどだけだね。こんな事ない?これは多分、誰でも経験があるって思うんだけど、嫌だな、とか、苦手だなとか、嫌いだなって思っている相手って、必ず、相手もそう思っているってわかるよね。例外は別だけど。これって、テレパシーの一種で、地球では以心伝心って言ってるよ。あと、虫の知らせとか、心がザワザワするとか、何となくそうした方がいいとか、逆にやめといた方がいいとか』

「あるある」

『でしょ。それって、人によつて、当たらない人もいるし、成長段階で個人差はあるけど、みんなあるんだよ』

「そういえば、じいちゃんが言ったことつて凄く当たってたなあ」

『お祖父さんは、何回も生まれ変わってきているし、魂は結構、色んなこと学んで大学生くらいだからね』

「へー。じいちゃんでもまだ大学生なんだ」

『そう。逆に、六十才や七十才になつても、小学生や幼稚園の人もいるよ。今の人生では七十年生きたかもしれないけど、魂的には、生まれ変わりの回数が少ないんだよ。小学生だから悪いとか、劣っているって事じゃなくて、その段階のことを学んでいるって感じ。その反対で、まだ、四十才にもなっていないのに、すごく考え方が大人で、若いのに何であんなことが言えるんだらうって人は、これまでに沢山のことを学んできた魂なんだよね。後者の魂は結構過酷な人生を歩むことが多いね』

「なるほど。何となくわかるよ。この人、僕より年上なのに、これまでの人生で何を学んできたんだらうって人、沢山いるよね」

『そう。魂の年齢と肉体の年齢は別なんだよ。だからって、その人が悪いってことではないんだよ」

「魂の年齢が違うから、その人にあつた学びをしているってことでしょ」

『そうだよ。さすが、呑み込みが早いね。それに魂の年齢が幼い人からも学ぶことは沢山あるんだ』

「ええ？大学生が幼稚園児から学ぶことがあるってこと？」

『そうだよ』

「自分より先輩の人から学ぶことは沢山あるよ。でも、後輩から学ぶことつてあるのかなあ」

『あるさ。沢山経験を積んできた分、余分なものも付いてくるからね』

「余分なもの？」

『そう余分なもの。例えば、罪悪感、虚栄心、依存心、自己卑下、人の顔色を見て自分の言いたい事を言えない人がほとんどでしょ。でも、小さい頃は自分の気持ちを素直に言えてた人が多いよね』

「それって、当たり前じゃないの？人が生きて行くのに、自分の我儘ばかり言ったら、社会なんて成り立っていかないよ」

『簡単に言うと、過去の傷ついた経験から、自分を守る為にエゴが発動してるとでも言ったら伝わるかな？』

「わからない。混乱してきたよ」

『元々、人間は純粋な生き物だったんだ。だから自分の気持ちの伝え方も知っていたんだ。僕はこうだよ。私はこうなのよ。君はこうなんだね。って上手く気持ちを伝え合える事が出来ていた。でも、あるとき、支配する存在みたいなのが出現したんだ。人間は純粋だったから直ぐに支配されてしまった。その後に生まれた人間たちのDNAは元来のものと、大きくかけ離れてしまった。そこから人間の苦悩が始まったんだ。心の中が真っ黒だけの人もいなければ、真っ白だけの人もいない。でも、人間は真っ白に近づきたいと思う。これが成長というんだね。どんな魂も成長したいと願っている。元に戻りたいんだ。我儘と自分の意見や気持ち、感情を伝えることの違いがわからなくなっているんだ』

「わかったけど、わからない」

『ハハ。その表現。わかるよ。説明はわかったけど、支配する存在って初めて聞いたからわからないよね』

「そうそう。わかる？」

『わかるさ。そんなDNAがあるから支配して気持ちいいと感じる人間は黒に近い。あえて白と黒で表現するけど、みんなの個性が生きてみんな笑顔でいると気持ちいいは白に近い。むしろもう白だね。世の中におかしいことって沢山あるでしょ。変な校則とか。会社とか学校に髪型まで決められるのってどうかな？飲食店などで髪が入らないようにとか、筋の通った決まりじゃなくて、どうでもいいことを決めて従えみたいなのは、支配のDNAから来てるよね。そこに反発するのは、純度の高い子供だよね。大人でも純度の高い人はそんな世間には馴染みにくいね』

「なるほど。話を戻すけど、君のことまだ思い出せないんだ」

『そうそう。話が大きく脱線したね。元々、人間は、何で地球に来たのか知っていたんだ。わからなくなったことを、霊的無知と表現する人もいる。それを思い出してもらおうと、有名な人ではイエス・キリストや仏陀なんかさうだね。イエスは宗教を広めに来たらんじゃないよ。イエスの死後、人間が勝手にキリスト教を創ったんだ。イエスは今でもいるよ。肉体がなくなつてからも仲間と共に地球を守ってくれている。今の世の中でも、イエスや仏陀と同じ活動をしている人達もいる。時代が違うから、やり方や見せ方も違うけどね。良和のお祖父さんも肉体は無くなつたけど、今、全て思い出せて、とても幸せなんだ。良和もきつと私のことを思い出すときが来るよ。焦らなくて大丈夫』

「そうか、人間は霊的成長と共に色んなことを思い出すんだね」

『そう。人は、成長と共に元々の人間の姿に戻る。肉体を持ったまま、肉体に宿りながらにしてアセンションする時代なんだ』

「アセンション？」

『アセンション。肉体は三次元だが精神、靈魂、魂は五次元に行くことが可能なんだ』

「五次元・・・？」

『五次元。比較、優劣だね。それがないから差別もない。意思は瞬時に伝わるよ』

「じゃあ、おまえ、うざい。つて思った瞬間に伝わるの？」

『ハハハ。答えとしてはYESだけど、五次元ではウザイって感情はないんだ。ウザイって感情は重い感情だから五次元には持つて行けないよ。さつき言った、余分な感情を全部無くして軽くならないと行けないんだ。おまえ、嫌い。とか、瞬時にそんな感情が伝わったら喧嘩になるし、だから地球ではまだ戦争が起きてる』

「重い感情をなくすことなんて出来るの？」

『出来るよ。愛と調和に生きるつて決めるんだ』

「たったそれだけでは無くなるとは思えないよ」

『その通り。でも最初に、そう決める事から始まるんだ。何でもそうだろ？この学校に合格したい。この会社に就職したい。この人と結婚したい。結果はどうであれ、そう決めるところから行動が変わり、決まっていくな。そして、怒り、恐れ、焦り、不安、そんな感情に蓋をせず、感じ切るのさ』

「嫌な感情なのに、感じるの？」

『そう。どんな感情も、自分を守る為に今まで一緒にいてくれたんだ。だから、感じきると薄らいでいく。感じないように蓋をすると増幅する。良い感情まで感じないようになる。心に蓋をして生きて行くことになる。何をどう感じているのかわからなくなる。自分が今、何を食べたいのか、何をしたいのか、どんな仕事がしたいのか、何が好きなのか、何が嫌いなのか、何もわからなくなる。まるで生きたゾンビだ。感情を感じきるといっても、怒りや、不満、不安を人にぶつけることでは無い。ただ、自分で感じる。感じている自分を感じるんだ。嫌だと思ふ感情が湧いてきたら、今までありがとう。私にはもう必要ないからさようなら。と言って感謝して宇宙に帰すんだ。するとその感情は昇華されて宇宙に帰るよ。手放したネガティブな感情の代わりに、宇宙の愛と叡智が変換されて戻ってくると意図するんだ』

「それだけ？」

『それだけだよ。でも、一回じゃなくならないよ。何回も何回も繰り返し、悲しい時も、孤独な時も、苦しい時も、感じて、手放して自分の中の愛を拡大する作業だ。地球にいる間は完全にはなくならないけどね』

「わかった。やってみるよ」

『ひとつ言っておくね。僕の今の説明も受け取り方によって、今後を左右しかねないからね。ネガティブな感情が悪いつて言ってるんじゃないんだよ。例えば、怒りもただのエネルギーで、その使い方間違わなければ、凄く強烈な行動力になったりもする。この地球では、月と太陽、昼と夜、光と影のように、全てが陰と陽で形成されている。どんな感情もただのエネルギーであって、波動に過ぎない。この時代になって、人が進化し、便利だけじゃない心地良さを追及し始めたんだ。すると、怒りや、苦しみ、嫉妬や、孤独、その感情は心地よくない。むしろ、自分の感情で自分が苦しんでいることに気づいたんだよ。じゃ、心地良い感情を選べばいいと考えたんだよね』

「え。感情を選ぶの？感情は感じるものじゃないの」

『難しい、いい質問だね。物事があった時、感情は先に、嬉しいとか、むかつく、とか瞬時に感じてきたよね。でも、ある程度成長してくると、そこに理性と、愛も育っているから、一瞬、ウギョ！って思う出来事に出くわしても、一喜一憂しなくなるんだ。もし、誰かが、自分に怒りや、苛立ちをぶつけてくるようなことがあっても、その背景に、ストレスや承認欲求や、自己卑下など、その人も気づかない感情が潜んでいることがわかるから、同調して怒りが湧いてこないし、むしろ、受け止められる。受容できるようになる。ただ、こちら側も人間やつてるんだから、何度もつてなると、そつとその人から離れることになるよね。そんな出来事が多く起る場合は、また、別の話なんだけど。怒る感情がないわけではない。だだ、怒ると自分の気分が良くならないから怒りを選ばないんだ。怒ってスッキリするならそれでもいいんだよ』

「なるほど。わかったよ。じゃ、常に、自分の感情をいつも見えないとわからないよね」

『そうさ。自分を客観視して、今、何を感じ、どう思っているのか。なぜ、そう感じるのか、思うのか。これは、とても大切なことだね。多くの人は、自分は正しい、間違っていないと思ひ、あの人がこうだから、私は腹が立つのよって。ほとんどそうだよ。でも、成長する人は、合わせ鏡って意味をよく知っている。どんな現象からも学ぼうとしてるよ』

「でも、やつぱり、よくわからないな。悲しい出来事や、辛い出来事が起きた時に、何も感じない感情のない人間になるってこと？」

『悲しい出来事や、辛い出来事を、なぜ、悲しい出来事と捉えるんだい？』

「悲しいからだよ」

『堂々巡りだよ。悲しいと感じてる。でもその背景を見ようとしてないからさ。どうしても、野球選手になりたかった。でも、右手の故障で断念せざるを得ない状況になった。わからないときは、ただただ、悲しい、悔しいと思う。その時はその感情を感じる必要があったんだ。その後、何年もして、野球選手のユニホームを作る会社を立ち上げ、たくさんの人に喜ばれ、お金という形でたくさんの豊かさも流れてきて、子供の野球チームの監督になって、とても幸せな生活を送り、あの時の悔しさがあったから、今の自分があるって。こんな人結構多いよ』

「そのため？」

『そう。そのため。筋書きの中の通過点にしか過ぎないってことかな』

「なるほど。じゃあ、今だけを見ることも大切だけど、もっと大きな視野で見る必要があるんだね」

『そうだね。今を大切に生きながら、大きな視野で人生を見ることも大切だね』

僕はしばらく、夢か現実かわからないまま日常の暮らしに戻った。

時が経つと共に、やっぱりあれは夢だったんじゃないかと思うようになった。

第6章 不思議な子供

あの日から、僕は筋トレするかのように、自分が心地良いと思う感情を選ぶように訓練した。

すぐには上手くいかなかったが、以前だったら、この状況で腹が立っていたなとか、随分、丸くなったように感じ、自分の感情を外側から見れるようになっていた。

どうしようもなく落ち込んだり、どうしようもなく悲しくなったり、なんだか前より、感情の浮き沈みが激しくなったようにも感じた。

どうして、こんなに感情の波を感じ、僕は全く成長してないんじゃないかと思うことも多かった。

そんな自分に苛立つこともあったり、日々がモヤモヤしていた。

モヤモヤを無視すると、増幅する。心地いい感情を選ぶ？

わからん。わからん。と頭を抱えて眠りにつく日々が続いた。

ある日の夜、眠っていると、僕はエレベーターに乗っていた。黄金色に輝く柱が何本も立っていて、地球にあるエレベーターとは全く違ってこの世の乗り物ではないと思った。

エレベーターの中には、男の子と女の子が二人乗っていた。

僕の腰の辺りまでの身長で、とても温かな雰囲気と穏やかさが伝わってきた。無言だったが、とても心地良さを感じて僕の心も自然と穏やかだった。

どこに行くのだろうかとか、疑問や不安を全く感じていない。

それに、エレベーターは超高速で、地球を突き抜け宇宙空間に突入したことがわかった。

なのに、何の不安も感じないのはおかしいが、全く感じず、ただ心地よかった。

時折、二人の子供は目を合わせ、微笑んでいた。不思議に、その時、もうすぐ到着するんだと感じた。

透明のエレベーターの扉が開き、子供たちは先に降りて行った。僕はその後を歩いて行った。

降りた先には、不思議な街が存在していて、家は丸いドーム型でカラフルな色彩があらゆる場所に使われていた。車はコンパクトなものが多く、一人乗りのものが多く、車の形も全体的に丸みを帯びている。

子供たちは、ある一軒の家の中に入って行くと、僕の前に黄色い車が止まった。ドアが自動で開くと「さあ、乗って」と、小人みたいなおじいさんが言った。

僕は何の躊躇もなく車に乗ると、車は車輪をしまい、家の屋根の上を高速で飛んで行った。

一瞬にして、ある白い建物の前に到着した。

と、同時に、車のドアが開き、小人みたいなおじいさんは、また高速で飛んで行った。

白い建物の扉が開き、僕は誘導されるように案内された。

長い廊下を進んで行くと、応接室みたいな部屋があり、扉はなく、机とテーブル、大きなスクリーンが一台浮かんでいた。

そこには白いガウン、マントのような服を着た背の高い男性らしき人が「ようこそ」と言つて僕に腰掛けるよう手をひるがえした。

すると、車輪のついたロボットがトレーを持って近づいてきた。「どうぞ」というと、トレーの上の飲み物を取るように促された。

ピンク色のような少し赤みがあったドリンクは、飲んだこともないような味で、地球で例えるなら、グアバジュースとアサイージュースを足したような味でとても美味しい。

一息ついた僕は、背の高い男性に誰かと尋ねた。

男性はニツコリ微笑んでこう答えた。

「初めまして。私は、ここの館長です。あなたは私のことを、男性だと思っている。正解です。ただ、不思議なことに、あなたが今、住んでいる星とは少し違います。男性と女性と体は二種類ですが、ほとんどの存在は中性的で、全員が、女性性と男性性のバランスが取れています。なので、男性は美しい人が多く、女性はカッコいい人が多いです」

僕は呆気に取られ、ただ「はい」としか返答できずにいた。続けて館長は話した。

「あなたは、何故、ここに連れてこられたのか、そして、ここが何処なのかも知りませんね。気持ちにはよくわかります。ただ、ここで起きたことが夢で終わってしまったわれないように、よく観察して下さい。もうすぐ、あなたの大好きなお友達がやってきます。詳しいことは、そのお友達に聞くといいでしょう」

館長が消えた後、僕の背後に暖かいものを感じた。
振り返るとドラゴンがいた。

「ドラゴン！ドラゴン。元気だったかい？会いたかったよ」

「元気だよ。この通りさ」

僕は懐かしさと嬉しさで胸が張り裂けそうだった。

「ドラゴン。わかるかい。僕が今、どれだけ嬉しくて興奮しているか」

「わかるよ。わかるとも。同じ気持ちだよ。この間は、なかなか思いついてくれないから、考えたんだ。どうすれば、全部思いついてくれるかってね」

「全部？思い出す？」

「地球にいて、思い出すなんて、ありえないんだけどね。色んな感情、感動を感じるためには覚えていたら味わえないからね」

「よくわからないことだらけでさ。よかったよ。ドラゴンに会えて。僕はドラゴンが言ったように、頑張ったんだよ。でも、何だか成長していないようで、感情を選ぶのか、無視すると増幅するって言っただし、もうどうすればいいかわからなかったんだよ」

「時間はたっぷりある。ゆっくり話そう」

「そうだね。で、ここは何処なの？」

「ここはベガ星だよ」

「ベガ？」

「そう。もともと、良和がいた星だ。アンタレスにもいたことがあるけど、こっちの方が馴染みがあるかなって。それに、ベガは既に

六次元にアセンションしているから、私の姿も地球よりはつきり見えているはずだよ」

「そうそう。はつきり見えてるよ」

「じゃあ、最初の質問だね。成長してないように感じる時は同じ地点を回っているからさ」

「同じ地点？」

「そう。同じ地点。成長を図で表すと下から上へ螺旋状を描くような形になるんだ。螺旋の周囲を①から⑩までの点があるとして、もう一段上の螺旋に行った時、同じ番号の地点に差し掛かったとすると成長していかないような錯覚を感じる。でも、それは同じ地点というだけで確実に一段階上の螺旋にいるんだ。だから確実に少しずつでも成長してるってことだよ」

「なるほど。よくわかるよ」

「あと、感情を選ぶことと、無視することだよ。これは簡単さ。感情は無視しちゃ駄目だよ。感じるんだ。そうでなくても、今、地球にいる人たちのほとんどが感情を殺してしまっている。だから本当の自分がわからなくなってしまうんだ。無視するのは思考だよ」

「思考？頭で考えていることを無視するの？」

「そうだよ。脳はコンピューターの役割なのに、いつしか人間は脳に支配されつつあるんだ」

「脳に支配されるってどういうことだい？」

「人間は過去の経験から得た感情を脳は覚えている。良かった経験よりも苦しかった経験や、辛かった経験を回避しようとして危機回避能力が元々備わっているんだ。二度と傷つかないように自分を守ろうとしているんだ」

「それって良いことじゃないの？」

「悪いことではないよ。でも、そのことで、安全な場所に留まったり、本当はチャレンジしたいのに行動出来なくなったり、恐ろげが出てくるんだ」

「安全な場所に留まってはいけないのかなあ？」

「安全な場所って難しい表現だけど、脳は安全や安定を求めるけど本来の魂は成長するために好奇心が旺盛なものなんだ。例えば、本当は絵描きになりたいのに、絵描きでは食べていけないからコックさんやっていたり、生きていく目的が食べる為だけになってしまっているんだ。本当にコックさんが好きな仕事ならそれでいいんだよ。ほとんどの人が、好きなことでなく、食べるために仕事をしている。人間としたら当たり前なことだけど、魂が成長するに従って、それでは満足できなくなってくるんだよ。給料が少なくてもいいから本当にしたいことをしたくなる。また、安定のための仕事は何故だか上手くいかなくなって行くこともあるよ」

「うん。生きていたら、食べるのが大切だよ。光熱費やいろんな支払いがあるからね」

「そうだね。趣味でもいいよ。自分の本当に好きな事を見つけてするだけでもいいんだ。本当に好きな事を見つかるまでが大変だね」

「そうだよ。自分が本当にしたいたいこと。好きなことなんて聞かれてもすぐには答えられないよね」

「例えば、両親に凄く叱られて育ってきた人は、社会に出てからも叱られないように、非難されないように必要以上に神経を遣うようになるったり、とても奥深い内容だから、まずは自分が癒されることが先決なんだけどね。簡単なことなら、本当はこの靴が欲しいのに、高いから買える金額の範囲内で選んだりね」

「簡単なことじゃないよ。収入が決まっていたら、本当に欲しいものなんて買えたりしないよ」

「安い無駄な物を買わずに、本当に欲しい物のために貯金して買う人だっているし、欲しいと思っていたものをプレゼントしてもらえたり、人から譲り受けたりする人もいるよ。この辺りは、引き寄せの話になってくるから、思考を止める練習からしないと本当の心の声は聞こえてこないよ」

「引き寄せ？」

「そう。引き寄せの話は深く話すつもりはないけど、簡単に言えば幸せな気持ちでいると幸せが引き寄せられる。愚痴ってばかりだとまた愚痴る現実を引き寄せる。それだけのことだよ」

「生きていたら苦しいこと、辛いと思うことたくさんあって、それを感じてるってことは、また、辛い現実を引き寄せるってこと？」

「まあ、そういうこと」

「ドラゴン。君は本当に友達かい？君は地球で暮らしたことがないからそんなことが言えるんだ。どれだけ人が幸せを願い求めているか知らないからそんなことが言えるんだよ！」

「まあ。まあ。良和の気持ちはよくわかるよ。落ち着いて聞いて。幸せって何だい？」

「幸せって・・・そりゃ、人によって違うよ」

「そうだよ。人はお金が欲しい。お金があつたら幸せだと思う人が沢山いる。確かに、地球ではお金は大切だよ。でも、沢山のお金を持つていても幸せじゃない人もいる。反対に、お金がそんなになくても、とても幸せな人もいる。両方あればもつと幸せだよ」

「そりゃ、最高さ」

「そう。私は、そんな話をしているんだよ」

「？。ドラゴン？よくわからない。またわからなくなってきたよ」

「全部を理解するのはそう簡単じゃないかもしれない。でも、地球で本当の幸せを感じたいのなら、真実を知る必要がある」

「真実？真実って何だい？」

「やっと、本題だよ」

「何？ドラゴン。ここから本題なの？」

「そうだよ。これまでの話は良和の疑問に答えていただけだよ」

「そう・・・そうだったね」

「準備はいいかい？」

「うん」

すると、部屋に浮かんでいた巨大なスクリーンに、僕が生まれてからこれまでの人生の大きな出来事が映画のように映し出され、それを僕はドラゴンと一緒に見ていた。

「ドラゴン、これって？」

「そうだよ。良和の地球での今までの人生だよ」

「どうしてこんな見るんだい？」

「計画どりだよ」

「えっ！計画通りだって？」

「そうさ。大まかなストーリーは決まっているんだ」

「人生が決まっているっていうの？なんで？決まっているなら何を頑張ったって、努力したって無駄だし無理だよ」

「無駄でも無理でもないんだよ。宿命は変えられないけど、運命は変えられるって聞いたことあるでしょ？」

「あるよ。でも、その意味はよくわからないんだよ」

「じゃ、ブループリントって聞いたことある？」

「うん。本で読んだよ。でも、それもよくわからないんだ」

「簡単に説明するとね、大まかなあらすじは生まれる前に自分で決めるんだ。だからって全部決まっているわけじゃないんだ」

「そんなはずないよ。自分で決めるなら、もつと楽しくて楽しんだ人生を決めるよ」

「そんな人もいるよ。でも、良和の魂は簡単にクリア出来ることは楽しくないとそれを望まなかったんだ。実際に、君はゲームを選ぶ時も、ただ単調なゲームより、なかなか攻略しづらいゲームを好んだよね」

「そうだよ。何度も挑戦して、やっとクリアできた時の達成感が大好きだよ」

「そう、そんな魂なんだよ」

「なんか腑に落ちちゃうな」

「腑に落ちるってことはとても大切だよ。頭だけでわかっているのとではわけが違うからね」

「ドラゴンはさつき、全部決まっているわけじゃないって言ったよね？」

「そう。人生の設計図は、まだ青写真。ただの青写真に過ぎないんだ。生まれた場所とか両親、宿命の部分は変えられない。でも、運命の部分の設計図は、変更自由なんだ。家を建てる前にキッチンの場所や面積、リビングや寝室なんかも大まかに設計するけど、設計図はあくまでも設計図だよ。やっぱりキッチンの場所を変更したい。とか、バスルームの面積を変えたり出来るのと一緒に、自分の人生を想像して、創造するんだ。みんな、自分がクリエイターって事を忘れてるんだ」

「そうなのかな。自分で・・出来るのかな・・」

「それ、思考、さつき言ってた脳の声だよ。そんなの嘘だよ。出来るはずないよ。無理だよ。何したって変わらないよ。脳と魂の声を聞き分けるんだ」

「ドラゴン。僕、何だか不安だよ。何だか怖いよ。何だかわからないんだ」

「良和。不安でいいんだよ。怖くていいんだよ。今、その感情を感じる時なんだ。不安と恐れを感じていいんだ」

「わけがわからず、何だか涙が出てくるんだ」

「いいんだ。いいんだよ。涙は魂に響いている証拠さ。涙、体は魂と直結してるからね」

「そうなんだ、何だか涙が止まらないよ。悲しいわけでも何でもなくのこに」

「波動が軽くなってきたんだ」

「それ、何？ドラゴン。わからないことばかりだ」

「魂が上昇すれば、波動が軽くなるんだ。高くって強くなるって表現もあるね。いい兆候だよ」

「そうなの。何だかそう言われると、嬉しいなあ」

「魂が成長するって、波動の領域が変わるとも言えるんだ」

「波動の領域？」

「そう。波動が軽くなる、高くなって強くなるってことは、上に3センチ上がった分、下にも3センチ領域が広がることなんだ」

「それ、何となくわかるよ。僕は、辛いことや悲しいことを経験した時、その分人の温もりや思いやりにも気づくようになったんだ」

「それだけわかっていれば十分だよ良和。自分で答えを言ってるね」

「何の答えだい？」

「本物を知るには偽物を知る必要がある」

「ドラゴンの言い方は難しいよ」

「本当に美味しいウニを知るには、その反対のクソ不味いウニを知る必要がある」

「それならわかるよ」

「幸せを知る、感じるにはその反対を知る必要がある。本当の愛を体験するためには、その反対を体験する必要がある。だからその反対を教えてくれた人も愛なんだ」

「じゃ、全部、愛なんじゃない？」

「そうだね」

「それで、僕のこれからのブループリントは見れないの？」

「見たいかい」

「怖いけど見たいな。それに、こんなの嫌だと感じたら自分で変えられるんでしょ？」

「そうだよ。私が言ってることが合っているか実験してみるといいよ」

「そうだね」

「それには少しの勇気が必要かもしれないけど、良和なら大丈夫さ。とても勇敢な魂だからね」

「僕が勇敢なの？」

「とつても勇敢だよ。地球にお化け屋敷つてあるでしょ。ものすごく怖いお化け屋敷に一人で入って行く勇者みたいさ」

「それつて、褒められてるのかなあ？」

「勿論。褒めてるよ。高次元はネガティブな感情はないから、それを経験するために地球に行くとするならば、地球に行くこうとする全ての魂は勇敢な魂ばかりだよ。さあ、続きの設計図を見よう」

その後、僕は僕の人生を映像で見て愕然とした事を覚えている。

第7章 全ては導かれていた

僕が目覚めたとき、母さんは旅行から帰りお土産を広げていた。土産話もたくさん聞きながら、僕は一日しか経っていない時間が数週間にも感じ、とても不思議な感覚だった。

その夜、母さんはこの家を売って、長野県に小さな家を買って移住したいと話した。

慣れ親しんだ京都の街を離れることは、少し寂しいけれど、じいちゃんが亡くなった日からずっと考えていたらしい。

僕は母さんの気持ちを尊重して、好きなようにしたらいいと心からそう思った。

僕にこの家を残してくれたところで、もう、恋愛とか結婚とか全く考えてもいなかったし、一人で暮らすには大きすぎるし、僕が長野と一緒にいくと母さんも安心かなって思ったりもして、母さんの意見に大賛成した。

母さんは、一人でも引越すつもりでいたらしいが、僕と一緒に行くことを大賛成してくれた。

家を売りに出してから、とんとん拍子に売り手が見つかり、長野の家もここだと思おう物件に出会うまで、そう時間はかからなかった。

そうこうして、引越しの日まで一ヶ月となり、少しずつ荷造りをし、最後は丁寧に家の掃除を済ませた。

たくさんの思い出が詰まった家との別れも、胸が詰まる思いもしたが、新しい場所での新しい家に希望もあつて、なかなか複雑な心境を通過した。

新しい長野の家は、森の中の一軒家つて感じで、暖炉がある平屋だ。

母さんは大変喜んで、京都の家とさよならした感情はどこへやらつて感じだった。

荷解きをしながら、僕は合間に仕事を探した。

パソコンがあれば自宅で仕事出来る時代にもなったし、僕は何か自宅でできる仕事はないかと色々考えていた。

以前から興味のあつた服飾の仕事を自宅でできないかと考えた。母さんはよく既製品の洋服を買つては、ここがもっとこうだったらとか、ああたつたらとか、自分の思うような洋服には中々巡り合えないと言つていたことがヒントになったこともある。

僕自身もそうだった。スーツがバラバラで売つていたらいいのと最初に思つたのは、随分前からだった。

世の中がそのようになりつつはあるが、セットで買つてお直しはまだまだ当たり前つてところは多いし。

上はLだけど下はMつてスーツないしね。

男性、女性問わず、沢山のデザインは僕の頭の中にたくさんあり、母さんにミシンを教わつて、もし、会社が大きくなれば、デザインナーやお針子さんを雇えばいい。

そんな構想が僕の頭の中を駆け巡り、想像すると気持ちも楽しくなつてきた。

そんな構想が現実になったのは、それから一年が過ぎた頃だった。母さんも服を縫うのを手伝つてくれたり、インターネットで販売してからは評判もよく、売れ行きも好調だった。二人では毎日が目まぐるしく過ぎ、母さんは長野に来て自然の中でゆっくり余生を暮らすはずが、何だか急に忙しくなつてしまい、老ける暇がないと言っている。

ある晩、母さんにゆっくりしてもらいたいとの思いから、事業を拡大しようと深夜にパソコンと睨めっこしていた。

すると、自宅の玄関の辺りが車のライトで照らされたかのようになり、眩い光が部屋の中に入ってきた。

こんな深夜に来客があるはずもなく、僕は疲れからか、幻覚が見えているのではないかとも思ったが、光が気になり玄関に足を運んだ。

玄関を開けると、映画で見たような円盤型の宇宙船が数機止まつていた。

今までに、宇宙船を見たことがあるわけではないが、それを見た瞬間宇宙船だと分かった。

僕は一瞬怖かったが、宇宙船から5、6人のアメリカ人のような人が降りてきて、映画で見えるような宇宙人ではなかったので内心安心した。

一人のボスらしき女性が「良和」と言っただけに入ってきた。

僕は「Yes」と答えて招きながら、僕のこと知っているんだと心の中で思った。

どうして、僕は彼女達を家の中に招き入れているのかは自分でもわからない。

彼女達がリビングに腰掛けると同時に、母さんが寝室から起きてきた。

不思議に母さんは笑顔で、驚きもしない。

宇宙人達は、母さんを見て「いいじゃん」と言った。

ボスらしき女性の名前はミリーと言った。

そしてこう話した。

「あなた達からしたら、私たちは宇宙人だが、私からしたらあなた方二人も宇宙人だ。星で言うなら地球人だ。だが、良和は元々地球人ではない。私がおこへ来たのは、その時が来たからだ」

不思議なことに、僕も母さんもこの日を知っていたかのように笑顔で頷いて聞いている。

だが、僕は何の目的かは知らなかったもので、ミリーに尋ねてみた。

「で、その時って何でした？」

どうやら、長く話しているほど滞在できないと、ミリーはテレパシーでその意味を伝えてきた。

僕も母さんも納得して、僕たちは宇宙船に乗り込んだ。

宇宙船に乗ってからミリーは話してくれた。

「あなた達が前の小屋（家）に住んでいると、この宇宙船の停めるスペースがない。だから、私たちがここへ引っ越すように促した。」

「あなた達を操っているわけではない。引っ越ししない選択もあったはずだが、双方で相談して決定したことだ」

どうやら、僕たちは眠っている間に、宇宙空間に行き来し、この日、ここで出会うことを約束していたらしい。

それを潜在的に知っていたので、ミリー達が来たことも、家に招き入れたことも、母さんが驚かなかったことも、魂でわかっていたと言っただけだ。

それに、本当の姿はもつと違うらしい。

僕も母さんも驚きが恐怖にならないように、地球人に似た姿で登場したと説明してくれた。

もう少し慣れたら、本当の姿を見せるとも言ってくれた。

地球には、まだ長い時間滞在できないのには理由があつて、柔軟な心を持っていない人間に見つかつてしまつたら、恐怖から殺されるかもしれない。

ミリーは地球人を愛しているが、恐怖に支配されている人間に出会つてしまつたら、私たちは人間を攻撃はしないが、私たちが攻撃されるかもしれない。

それを、避けるために長居はできない。あと数十年も経てば、自由に地球に行ける時がくると言つてくれた。

さて、僕の部屋でミリーがテレパシーで伝えてくれた核心の部分だが、僕は初恋の相手、玲奈と恋をして、その後、何人かの女性と恋をした。だが、僕は、恋愛を通して、愛について考えるようになった。

恋は自我が優先する。愛は、育もうとすると葛藤や怒りや、拒絶や苦しいことを体験する。

果たして、この世に真実の愛というものが存在するのか。

これは男女の恋愛に限らず、親子間、兄弟の間でも言えることだと思つた。

じゃあ、僕はひと通り経験した。だからもう二度と、恋愛もしないし結婚もしないと決めた。

そう決めたことも筋書き通りだったらしいが、どうやら、僕の知らない宇宙の叡智の存在は、ある意味嬉しいが、ある意味マズいと感じたらしい。

なぜなら僕の幸せが、宇宙の叡智の存在（人によつては神という）の幸せだからだそうだ。

で、その宇宙の叡智は、地球で人生のパートナーを見つけなければなら、違う星の存在と結婚させようということらしい。

これは、僕が宇宙の叡智に操られているという意味ではない。

僕の中にも宇宙の叡智があり、全ての人間の中に神のわけ御霊が存在する。

なので、僕の潜在意識、超意識が選んだとも言える。

ベガ星に行つて、僕の残りのブループリントを見たとき、愕然としたことは覚えてる。

だが、地球に戻つてきてからはすっかり忘れてしまい、その代わり、現実で何か出来事に遭遇した時、感覚的に鋭くなつたり、直感が冴え当たるようになったり、違うと感じた時は軌道修正したり、とても生きやすくなつた。

そんなことから、きつと家の前に宇宙船が来たことや、ミリーたちと出会つてもさほど驚かなかつたのは、計画通りだったからだと納得した。

母さんが一緒に宇宙船に乗つたのは、父さんのいる星に連れて行つてくれるとミリーが言つたからだ。

これは母さんの人生の設計図通りだったらしい。

ここで、母さんと僕は、親子になって、ミリーと一緒に宇宙に連れて行ってもらう選択をする人生を、魂で契約していたそうだ。

この星では地球と同じ時間軸ではない。

地球では過去から現在、未来へと時間が流れているように感じるだけで、宇宙全体から見れば、同じ時間軸なんだとか。

その後、僕は一軒の丸い家の中に入って行った。

この星では僕が最も愛した人が、僕の隣にいる。

この星ではパートナーと呼ぶが、地球でいう妻、奥さんだ。

玲奈とこうして一緒に暮らせる時が来るとは、僕は想像もしていなかったが、このような筋書きだったらしい。

その家の中には、いつかエレベーターで出会った子供たちがいた。

まさか、双子の子供の父親になるとは、初めからわかっていればとは、今更は思わない。

この星での僕の仕事は、白い建物の中で白いマントをはおりながら、建物の館長をしている。

この星での暮らしを、いつかまた機会があつたらお話するよ。

あとがき

この物語を最後まで読んで下さり、ありがとうございます。

激動の歴史の中で、日本人は大和魂を奮い立たせ、急激に日本を発展させ、私たちの先祖には感謝の言葉しかありません。

これからの時代は、私たちの精神、魂を進化させる時代です。

新しい時代を迎え、今、私たちに出来ること。

それは、人それぞれ違うでしょう。

社会で人の為に存在していない仕事などなく、また、人の為に存在していない人もいない。

共通していることは、全ての人が心の平穏、幸せ、平和を願っている事ではないでしょうか。

それが実現できる時代になりました。

心優しい日本人こそ、まず自己を赦し自己を愛されますよう。

自己の癒し、幸せは他の人の癒しになり、幸せにつながります。

全世界の人々が何らしかの繋がりがあり、絆の中には純粹な愛が存在することを感じることでしょう。

この物語を読んで下さった方々が、心からの幸せを感じることが出来ますように。

あなたにとっての幸せが見つかりますよう祈っております。